讃岐國名勝圖會

三木郡 三

ル 4
270
3

讃岐國名勝圖會巻之三目録

三木郡

郷名　土産　和爾賀波神社　大宮
若宮　蛭子社　二條城跡　公文城跡
阿一屋敷　鎌倉塚　真行寺　荒神社
山王社　大師堂　天狗杜　浄土寺
井戸城跡　塚原温室　行基堂　静塚
皷渕　尊德寺　八幡宮　宗壽院
玉泉峯　權現社　八幡宮　應神寺
三條城跡　諏訪明神　八王子社　願勝寺
白山　妙理權現　細川清氏墓　印地打
箕造　小添大浜墓　十河家紋由來　山大寺跡
石濱城跡　高岡砦跡　中坪砦跡　古壘

昭 270 3
碧水藏書

常光寺
虹瀑
熊野大権現 二本杉
八幡宮
徧往寺
山王権現
大畠砦跡
小野原
池戸城跡
観音堂
常満寺
最勝寺
五劔山

蓮成寺
迯岩追岩
高仙寺跡
雷塚
信光寺
菅神社
朝倉大明神
西徳寺
大塚城跡
牛頭天皇社
梶原景辰墓
妙徳寺
六萬寺
栗化石

長覚寺
熊野権現
高仙龍之社
牛石
龍光寺
観音堂
春日大明神
恵徳院
八幡宮
麻伏清水
白羽八幡宮
八栗寺
八栗城跡
輪蔵
大師堂

八幡宮
津柳
権現社
三ッ子石
田中城跡
東川城跡
菖枝松
八幡宮
法泉寺
平木城跡
松居天満宮
王墓
聖天堂
灌頂窟
通夜堂
鎮守社

佐藤次信墓
菜切石
中村宗卜墓
牟礼城跡
祈石
洲崎寺
安楽寺
小屋様之宮手妻之石

大夫黒墓
地蔵堂
宇龍山
惣門跡
駒立石
西林寺
土佐坊墓

塩竈社
長刀泉
田井城跡
継掛久重墓
國風純友合戦之所
土肥屋敷
肉醤
櫻井田紀連貞猪門貞世

源氏峯
操田光政墓
開法寺
射落畠
八幡宮

讃岐國名勝圖會巻之三

三木郡　武作沙城東ハ寒川郡に隷ひ南ハ阿波に接し北ハ海に限り西ハ山田郡に接す

○郷名。井戸　和名抄作井門　上井戸　下井戸　鹿庭　三村此郷なり　高岡　上高岡　下高岡村

奥山村　氷上　氷上村　小蓑村　田中　上田中村　下田中村　池戸　和名抄作池辺　池戸村

井上　井上村　平木村　鹿伏村　牟禮　和名抄作武例　牟禮村　大町村　原　和名抄作

○土産　化石　八栗山

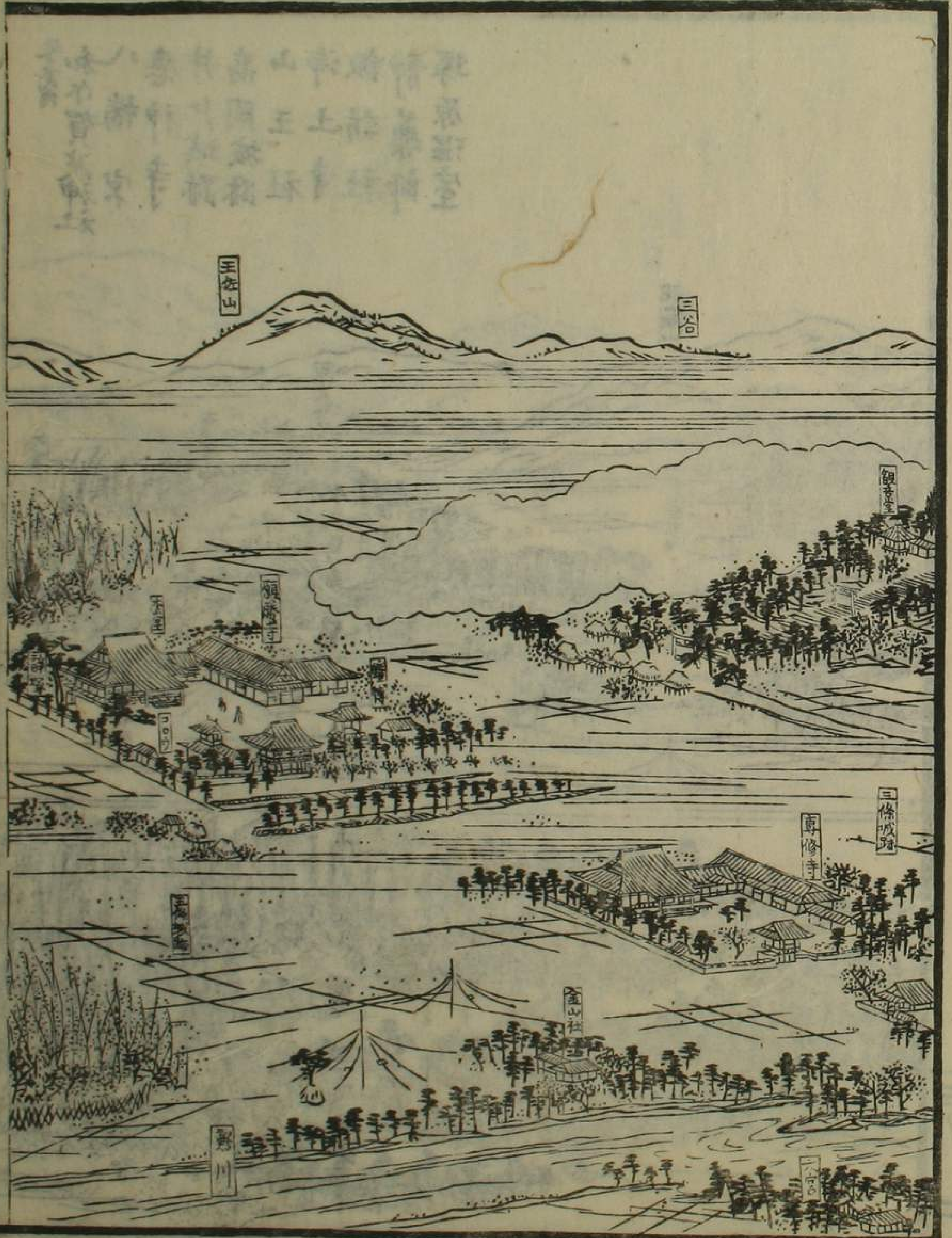
日本書紀曰持統天皇二年詔伊豫總領田中朝臣法麻呂等曰讃岐國御城郡所獲白鷰宜放養焉

和爾賀波神社　井戸村にあり　社司赤沢氏　土人八幡宮と称へり　延喜式廿四巻之一　八月十五日祭日

祭神　豊玉姫命　玉依姫命　攝社　神功皇后

当社鎮座未詳　社記に豊玉姫命を祀り今の晋川とさるなり　此所なると宜ひしものか此里を井戸と名付

真行寺
鎌倉塚
阿一屋敷
公文城跡
鼓ヶ淵
八幡宮
白山社
宗壽庵
三條城跡
專修寺
金山社
大宮
願勝寺
五條城跡



延喜式内
和尓賀波神社
八幡宮
應神寺
井戸城跡
高岡城跡
山王社
浄土寺
諏訪社
静薬師
塚原温室

和尓川乃神
當社司
源弘信

をうり鵜草葺不合尊とうみ奉る事ハ日本書紀にくはしく見えたり 略
のちこゝを山田部備生の流る不拝よりかひしより今にて千代さ絶ず
明神と崇め奉りしといふ天保六年公子紀額を自書の額を奉納し
たまふて社殿に掲かけ奉るなり

宝物 三十六歌仙額 細川備元殿は寺社奉行 安南左京大夫奉納せし 其板をけづりとりて六枚より額にて塗り 寄る宝院藍堂□□法華
鄙枚奥書 干時享保□年閏□月□日 法眼 作

法眼 紙 忠彦
邦内茜社詣記
わしつくとさうの乃りの越し鏡に仍の流をとしむうあ 坂上道啓

大宮 同所下谷にあり 祭礼九月十日 祭神大宮 姫命
陰子社 同所椛木にあり 並て社司 森氏 ○**荒宮** 同所にあり 祭礼同日
二條城跡 同所にあり 佐久間右衛門某ここに居せり ○**公文城跡** 同所にあり 石川氏とかう居せり
阿一屋敷 下井戸村にあり 多田満仲のちに足利の将軍義持公大永元年三月廿五日法諱にて近く将る方
鎌倉塚 同所にあり 往昔二十年四月故防の将軍より東に於て其の子代に鎌倉殿の孫 法名恵林院と号し大将と従ひてはさみ 其鎌倉塚を号し
とそのため従ひなし 経堂とよべる社のときなるんのさけ塚も人の墓とし

真行寺 昔当土人数しく姓失べ役を尋 此寺の宗をなしたるを浄土宗 同所にあり 宗号横山光明院 知恩院末寺 真宗寺末寺
本尊 阿弥陀如来 座像 並に基大士作 地蔵尊 弘法大師作 **法守社**
恵心作 安阿弥 **鎌倉井** 法然上人
当寺ハ天正七年十月宝蔵院徹誉法印の草創なり
荒神社 ○**山王社** ○**大师堂** ○**天狗松** 並門前にあり
浄土寺 同所にあり 浄土宗 京都本山知恩院末寺 寺号 宝蔵寺
本尊 阿弥陀如来 座像 恵心作 安阿弥作 **法守社** 菅神
当寺ハ永平六年九月明海法印の草創にて天保十二年八月廿八日焼失
井戸城跡 同所にあり 紀伊守何某といふ人居せし所なり
塚原温室 同所にあり 此所の温泉は大なる 古人の病を治せんがために入浴しける所なり
行基堂 同所にあり **本尊** 行作
静塚 同所宮木中代にあり 往昔此所に静御前といふ女の墓ありしとぞ 又塚のかたはらに経堂あり 静の墓なりとて参詣の

傍に板碑を安置す 碑の表面は南国大内氏小樽の人なりと説書に載る 漢
文にて記したる事おほく 委くは大和国高城山の方に祭神として居る事を詳に
記す 志の浦にて浮
み出ると見えたり

鼓が瀧 同所にあり 白拍子舞の古跡なり 鼓を打つ声のとき 武士に云ふ 仰ぎ見るの
つくしの瀧の 水の響きに 拍子の跡にて 沈みたる凸凹のごとくなり 平家の方の言葉
なり 正治年中 このとき 浪をとどめ ゆくまでの
名を伊勢三郎 義経に ... 家の方の子孫 経都落
のとき 当所山にて 白拍子舞を ... 見しかば ... 名をとどむ
白河院の御宇 法住寺の長老入定のときの ... 菩提を弔ひて鼓を打つと云ふの
えしもをお納めし
こののちくらゐ絶えし

尊修寺 同所にあり 一心山 称光院 浄土宗
京都 知恩院末寺 寺領二十石
本尊 阿弥陀如来 恵心僧都作 鎮守社 菅神
当寺は天文年中 宗覚上人の開創なり 寛永四年 火災によりて 旧記焼
失せり 先封主 ... 一正 ... より寺領二十石を納められて 今に 存せり
国主よりも 先規のごとくに 寄せしを納む
寶物。 月輪名号 円光大師筆 知恩院 宝誉大僧正 増上寺 顕誉大
僧正 同 ... 大僧正 添文あり 寛永年中 知恩院
秦川の
寿脚し ○末寺 尊念寺 豊田郡 ... 寺村にあり 宗一寺ある ... 出寺

八幡宮 同所 朝倉といふにあり 社人 赤松氏
宗壽院 同所にあり 三宝山 念仏寺
浄土宗 当所 ... 寺末なる 本尊 阿弥陀如来 恵心僧都作
当寺は天正年中 演誉上人の開創なり
玉泉菴 麻生村にあり 律宗
... 郡 ... 寺末庵 本尊 阿弥陀如来
当菴の本尊は ... 文化年中まで ... 寺の本尊なり
權現社 同所にあり
八幡宮 ... 村にあり 社僧 ... 寺 例祭 八月十五日
同所 ... 社 ... 神の ... 拝殿を納めて ...
... 寺 同所にあり ... 宗 ... 寺末寺
本尊 薬師如来 行基菩薩作 鎮守社 弁財天
当寺は延宝七年五月 ... 開創なり
三條城跡 同所にあり ... 寺 ... 安 ... 田 ...
... ... 社の ... 年 ... 月 ... 日 ...
... ... 元禄二年 ...

卦十石とらゑんらふ五色絹を天の命にいくらん御供の事あつく御太刀を寄進なり
さきら縁起年又主済くのあらぬ家より神ぐ社の御紙を寄進なり

須賀明神 旧あり 又当社は文明二年三月廿七日安西左衛門を勧請なり

八王子社 社僧高昌寺 旧あり撰録あり

願勝寺 旧あり撰録山般若院 一向宗 京都東本願寺門徒末寺

本尊 弥陀 聖徳太子作 恵心作 正信偈文 蓮如上人筆 祖師分骨

当寺は元久年中作 本願寺 源光 寺剣なり
寺紀日 文治五年 源義経を奥州に生害ありしのち妻婦静 若君の為
一字を建て追福と営まんと当所大門郷小渓庄に屋敷ありて寺の庵
地ならびに縁起を納くなつく 然るに寺は…
沢減にして茶も見のかへて制すゝふ縁がとの不面村にて逆仁
三年未寺田高く… 今に至るまで此所の灌をつくす
とらへあり 神寺の縁をなし… 静いらく 往昔の中将の光
仰のみなさ 御まもるところ 三月十四日 縁起をつくる
縁にて僧坊年の始に参り… 参詣山にて 剣をし
て源光を 此の処の御堂のあとをつれ… 旧跡の川浦と名く
世をとまりて ひとへに菩提をいのりかの書経をまつりし…

…五町ばかり東なる撰録の一字を建て寂円寺と名付く今は絶て
桂原寺と又村民まゝ撰録寺と呼び漢名の地となれり

白山 旧あり 廿所は法古跡なり

南海流浪紀曰建長元年八月七日立白峯至白山七里 同八日立白
山至引田一里 同九日立引田越阿波大坂至鵜津一里半

妙理権現 旧あり 社僧白山妙蔵院 祭礼九月十日

当社は延宝七年明海法印勧請あり

細川相模守清氏墓 旧あり 貞治元年七月廿四日清氏高屋城にて討死
のとき … 川原の宝蔵院明紀清氏引田にて葬る

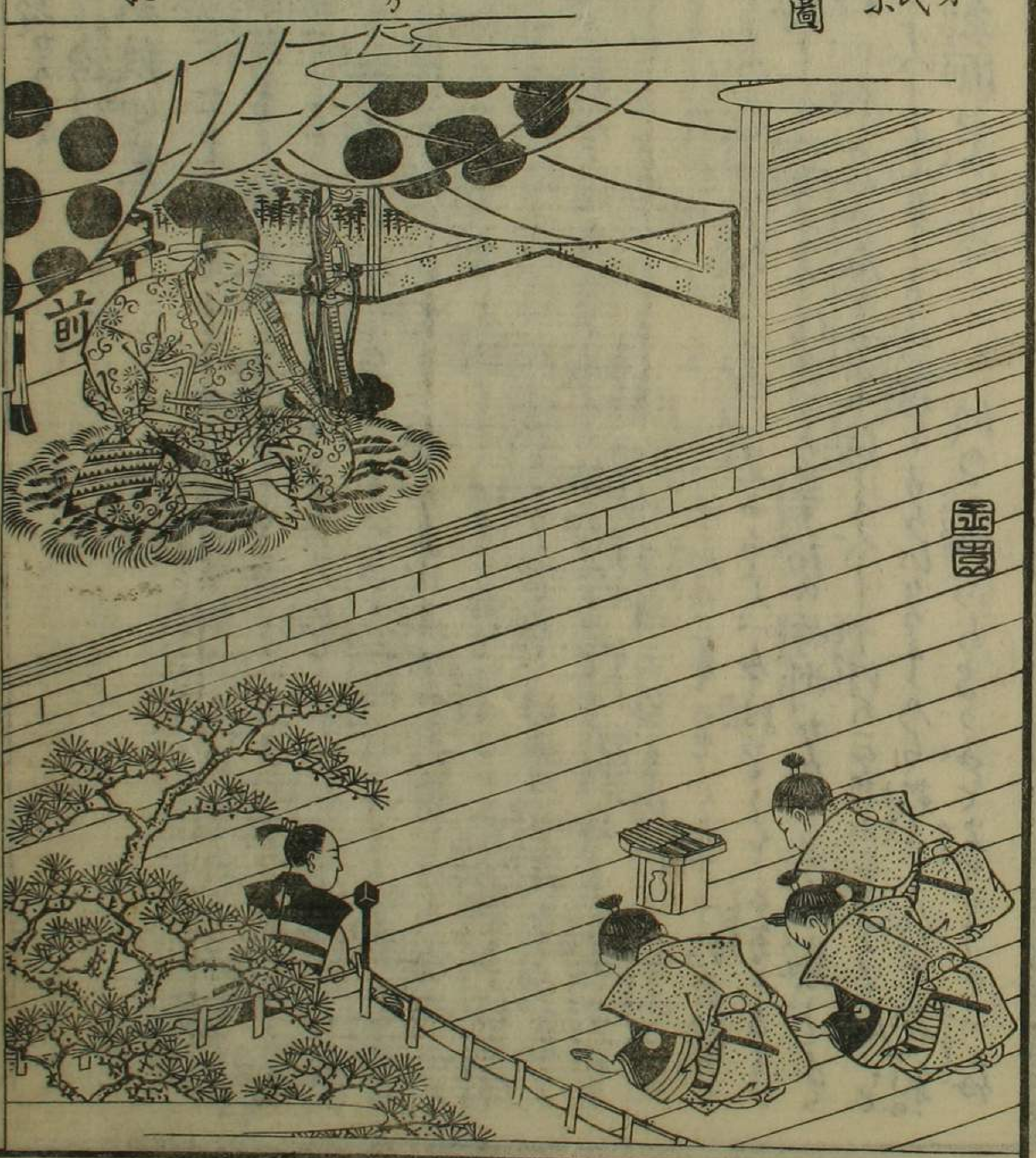
御坂 旧あり 先年一谷の戦場の古跡をなし当年の古跡を
ともなく 又当所に… 旧跡の縁なり

印地打の旧

古くは端午の日左右に結ひあり排を立てあり競ひ百廿を戦すてなん天魔の
諸国の社にも… 織装束の… 社ても… 旗を立て…
戦ずしく様をとりて千的 けりつや今にいたるまで…を射るなりなり

十河兄弟細川清氏に見ゆる図

友部方秀
かくれなき名こそあかき乃赤もろく家乃風をもふきつべき哉



舎人親王にしく弓矢の政刑と称す世俗男子ある家ぐ不幟をとらく
甲冑をかざるも此家風なりと云ふ菖蒲軍印にも似よりて五月
名ぐしあり屋罩のうへに宇佐の雲にかゝるもあり是をさるる
勉の法に伝へ継ぎ方は王墓に陣をとり添をさけ隊伍をなし立
暇居暇孫を乱して雌雄を争ひ勝負をあらそふ眼
とらまへ叫ぶもあり馬にあらねど親をつとふあり
床屋の一番息子がしらくのけ出竹刈得て名をねらふ牛飼の二八
弓士の六助が旅置をまつり手にふりけくらんは農家の郎人張り
十五歳とやいくん互に肩をおしあひ追羽子ありて逃のまゝり
流るゝ緑射くる矢さんこそかくして手拍子拍元席上机も立てし止まる
まで將ふ人まで修行者の衝も目あて勝平の伊乃くるしそ
ホゝうくなりうゝかしとくや

菖王の操や印地のそれ孫　新部老人 誹諧師 古竹

甚造　旧本にあり御修に安倍晴明の後裔とて住居せ
しを造り家をまつり老人白山相人といふ
小森太源基　旧本にあり文禄元年京家に住み衆弱き生得近郷新居に
おいて衆鮮の家になりむさし小森太源とよべる女郎人をよく学ぶ
まず雲くゆかりし事が生納を人物りしと論ずる事の浸かの為を続ける
そ旧村山某旧名右衛門うる家氏をも論ずるの後裔なりて今二女の修し守る

物の器なりとぞ

十河家紋由来

正平十七年正月十二日相模守細川清氏南朝に帰順して
楠正儀等と都の敵を追落して帝も山門に行幸なり。一時の勝
と云ども続く兵もすくなく又敵をけて南朝に帰せし人は
四国を鎮定して従ふべしとて此月に讃岐に下りて兵を集め
けるに元より細川に属せし人々なれば不日に多勢となり讃岐の国
うち勢ひ白山の麓に陣して四国の兵を招くに西尾城に十河右京
とて勇士あり其先祖ハ神櫛王より出て世々此国の豪族なり先年より
て讃岐に在ず清氏大に悦んで相見んとて呼ければ右京其二男あり
お伴ひきゐるべしとて其後神内孫四郎三谷兵庫同じく白山の陣へ
来たり清氏に相見るとき三男に扇子三本の上に一本投出し
人々の前にて翫くまで二男に扇子一本投出しと三男とる
弾戴しく退きたり清氏其の挙動の怜悧なるを見て大に感じて
神内三谷も宮扇を幕の紋とすべし十河ハ三男に与へし扇と
紋とすべしとて是より此紋を用ひたりとぞ其後清氏を諫めて右京一族
進退滋御子なし〳〵河の二好宗おちゐるを嘉てして一存

ぞ勇士なり一存又子なくして長治の弟孫左衛門存保を養て嗣とす
山大寺殿　旧河にあり東南山山大寺は細川頼之北河内の豪族なりしより田北河内ハ
讃岐の都の頼之(?)を崇て八幡の宮をも勧請せられし由を案ずるに是は頼之の
二王国より下馬札を建し基なりとそ其廟あり今二十年(?)旧をなせり
石清水殿　旧河にあり石清水八幡を宮に祀られし所なり
高屋殿　三好長治の建し所なり

二年氏ちびく後の安富紀前守盛方ハ下総国の
豪姓にして総氏の家臣細川頼之に属して天下
の警衛たるとき盛方の先祖安富民部丞ありて二年氏とくまひ
てより世々其の居城をのち綱仁三年中に民部丞備元保とかへ其後
の家紋の旧に依て戦功多く年の後細川に紀州ちり後細川相国の
合戦に討死すると我子孫おほし盛方後世代の旗下に属す長宗我
部元親讃岐へ乱入するや是と同じく戦功あり後ふたたび来るとき
家臣と散へ奔るを追く戦死の由陳を守らて小豆島にあり
ふのち其老名を改く紀富と改め安富にして下屋し後に立退良
の塚にて戦死す其子孫左衛門家の名をのこしそれんとそ云
伝への後を今は氏とて〳〵家紋の三ツ柏を用ひて三か所に子孫とて

中坪岩踏 坪上村にあり 因幡(いなば)の僧定宗(ぢやうそう)こゝにあり
常光寺 同所にあり 禅宗阿弥陀佛 一向宗 京都興正寺門徒寺なる

古塁(こるい) 同所にあり 串田(くしだ)和泉守の塁といふ

本尊 阿弥陀如来 六字名号 聖徳太子筆

当寺は應安年中沙門浄泉、和泉国の人にて

当国及び河内の法ニ帰依の輩多くあつまりて此所に来り当州にあり

末寺 西善寺 同郡 蓮勝寺 山田郡 善福寺 河内郡 三井村

常岩寺 北村 蓮光寺 同郡 圓徳寺 同郡 若江郡 西之村

西教寺 同所 宝正寺 同郡 常福寺 同郡 七ケ村 若江寺 同郡 志紀村

河内国を四ケ寺末寺当郡に六ケ寺末刹也 光専寺 三ケ村

遂成寺(まんじやうじ) 同所にあり 一向宗 常光寺末なる

本尊 阿弥陀如来 当寺は明徳年中 此の法師の草創なり

長栄寺(ちやうえいじ) 同所にあり 一向宗 同上

本尊は阿弥陀如来 六字名号 聖徳太子筆

末寺 来光寺(らいくわうじ) 宮川郡 三ケ所村

当寺ははじめ古績(こせき)にて廃屋となりて天正年中 三字の法名を賜はり 元亀年中

真州別なり正年中前住の開基にかゝりまのち一再興せり寛永年中

滝(たき)の宮(みや) 滝の宮村にあり 祭礼八月十五日

この所は保年中 社人まで来たれりしとぞ

飛瀑(ひばく) 小倉村にあり 雄瀑雌瀑とも 此の地(ち)の

人気をさけて此所へうつしたるといへり 此村の

さしもの山に入ればなるほどその瀑布を眺むるに古木

あまたありて山に茂りたる長き年をへたるもの

おほくの岩をつたひて雲のこゑをつたふ里人のうはさ

まことなるはそこのさまのすゝきのことをあかすつくしけれ

さしうつりかはるとの事なるがあまりさそはるゝ

さきのなるまゝにつけて女房まで見るものとをきの

なかくに十丈あまりなるやちおちくるさまは流れ山谷の

布をかけたるもかくやとおぼえなくしろくのまれ

ひとさだめにちかうて見るをともなひかへる

谷風の身にしむあたりに御幣のひくくらきこと

身のうちすゞしくなりてもとひや一覧とも

しばらく十丈あまりの滝のおとをつたへて

なにかうつくしきまでよそにむかひて出てかへる

うるはしくかくありしさまこの世のことならぬ

小蓑
雌雄瀧
従三位具選
廻合青山聳碧空一双瀑布表雌雄迸流成雨傾銀漢直下飛光掛玉虹近処沾衣蓑可着愛情題句筆難工先公曾是垂高詠勝景添名世々通
高尾養

宗非

ちゝゝみえ[illegible]白く[illegible]のゝてとこ[illegible]ゝさくみち[illegible]玉の手さ
[illegible]けむとゝ[illegible]ゝなき松の末にあやしきえ[illegible]ちよう
[illegible]のゝつはかゝし[illegible]ちてふくの[illegible]の絵
[illegible]そこみ[illegible]えいる[illegible]の名を滑石となむいふなる日のさしうつ
なるにおもひて天津[illegible]の瀧にうつりやく[illegible]虹のくちの[illegible]嬉
[illegible]もの[illegible]奴のさ[illegible]のふ[illegible]のこ[illegible]
おもひて[illegible]六月の中[illegible]三五月[illegible]
そこの[illegible]つのなし又この[illegible]小竹[illegible]
此[illegible]葉を[illegible]鑿の[illegible]
[illegible]
[illegible]の西[illegible]綿の[illegible]秋[illegible]
其の[illegible]の瀬[illegible]
かの[illegible]の柄を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]中納言[illegible]安倍[illegible]家持[illegible]
[illegible]前権中納言藤原詔光卿[illegible]
[illegible]十二月[illegible]
[illegible]
揚述雅志る 本藩士 矢野氏

前中納言藤原詔光卿

洞口懸長三千丈　決皆銀河掛中台　大珠小珠雹雪碎　驚聞晴午裏雨雷　織女綺新石自古　鮫人絹浄涙成堆　忽看神龍出窟宅　吐気萬丈衝蒼崖　巧架西橋穿飛瀑　々似天梯挿雲限　定知遊仙出洞口　直下不梯踏橋来

国君源卿公[illegible]を[illegible]ひて[illegible]卯月[illegible]の[illegible]と[illegible]ひこゝに三日
[illegible]
[illegible]

小蓑瀑布　後藤久包　本藩故老臣

連山西折眺望偏白日彩虹巖壑懸不到蓑峰幽絶地誰
看飛瀑落天邊

仝　岡井　鶴　号赤城 本藩儒臣 称郡大夫

崎嶇小路入氤氳飛瀑潺湲隔嶺聞千仭練光寒砕玉半
天河影遠穿雲虹懸誰辨雌雄色雷激応驚麋鹿群舊識
先侯曾賞詠傳車好此挹餘芬

仝　岡　長職　本藩故儒臣 称平蔵

碧峰界天聳決眥一蒼々虎吼千山動龍飛萬丈長彩虹
驕気色白日勝輝光直訪河源極溜従雲漢滂

仝　徳永顕忠　号華山

化翁何歳裂崚嶒奔出懸泉高此凭渇虹飲淵波凛々鳴
雷撃石嶺層々半空雨共晨烟砕五彩虹迎落日蒸更有
玉花灑毛髪満襟仲気奈飛騰

其余諸名家詩文等数多あれともこゝに略之

逃岩（にげいそ）　滝の東にあり　或ハ退岩とも作る　追岩（おひいそ）　同所にあり　或ハ生岩とも作る

熊野権現（くまのごんげん）　同所にあり　社人三好氏　祭礼九月九日　末社　春日大明神

当社ハ文治年中多田四郎といへる者阿波大麻寺より勧請せり

津柳（つやなぎ）　古戦場なり　柞山に添く樹林多し　岸を繞く業とす　寛政年中
公命を蒙て揆路池田まで新道を岸を修し追々業を遂しく
なりそと池田より来る道も近く
までも津柳嶺とてあやせり

南海治乱記曰　大永六年冬十月安富盛長と寒川太郎元政と数
年の確執に依て互にかまへける中にも寒川ハ阿波の三好筑前守に
懇に援助しく三好下野守に云付百余人の兵を率め百人に兵糧樵汲ともを
千有余人を従へく十河へ来りしむ阿波の三好勢より讃岐の安富か勢津
柳といへる寒川郡へ入むとすれば十二月廿日寒川中の名将ら退陣し
夕場にありしひかまへ行会とどまりて軍令を調むめんとす寒川元政
かのて阿波へ向と志し敵の来るを志つくまたは往をうんで地利を案じし
津柳にいくらく兵を潜まし敵をまつ阿波の兵是を察知せず　しく
止らんとするある寒川の兵急に発して手勢を鏃へ阿波を挑戦よりといへども
寒軍に敵を迎へく備漸くおようて混乱す寒川氏まま地利を得て
あ前さをまうり敵のうらくろ不出して閑寿を鏃手阿波の兵お後く敵を
迎へく大きに乱れ植田の兵へ敵後を寒川の兵将安藤孫左衛門か
雑兵の中お後の先陣としく武勇をあらわし首級を取りて若干も
ことを津柳合戦と云寒川氏より兵十く猪を制すしくりと去りて是を
三谷将内十河の割敵に阿波の兵加えらり是も後難をおもひはかりさ

わが婦女婆児とも當麻郡九郷にて壮男の者を擁ひ隊列をなし
行伍を整へつゝ要地をまもる三好氏十河の城を責め三谷 新門 十河の城を
守護しまた長尾おりて不意の敵を宮川ふせぎなまじひ平隣の戦におゐて錯する
軍兵を防ぎしが當麻の城ふ引入る植田氏三好氏宮川にて入りて氏家を
殺さし景訓をなし寄る讃岐両方の兵ハ香川山城守香西来り
おも間諜をもて曰植田氏家阿波乃三好を引出し宮川をせんとす
宮川破れて東方阿波に属せしも両方も立居りて大内氏も遂にしく
援兵をえて植田氏を退治すべし先づ當家の兵を出し宮川を援ずへ
あるべからずとて両方とも千余人を掃くこの舎弟が阿波の兵へかをを
ゆるく宮川氏を攻ハ國中の兵合起すへしよて方の大軍の勢ひも乃ち
宮記るとも阿波を立べからず必戦ひを止むべしとて兵を引て去る

熊野大権現
同所にあり 社人赤木氏 祭礼九月九日
の祀祉し
生なり
〇高仙寺後ハ
二本杉 社頭にあり以て杉の木の大樹称せられしの當所の前井氏
日本山の頂上にありもて大伽藍の地なりしに天正年中兵火にかゝり破壊せしを當所なる人再興なりし
高仙寺観王社 日本山にあり高仙寺の鎮守として今ハ當所の社なり
此寺後のことなれど古来さかりなりし地より
仏像多く掘出せしとなり
同中村にあり 社僧観光寺
祭礼八月十五日
末社 雲子 諏訪大明神

八幡宮
當社ハ承平六年八月勧請なり 社記曰 往古當社のかぎりに當りて

田中村

八幡宮

龍光寺

菅神社

山王社

福住寺

信光寺

氷上村

日笠松

小倉殿　参議兼右近衛中将藤實季

讃州氷上郷日笠數延家前庭有喬松雌雄相合一茎兩幹是吾邦所称相生松者也蓋世傳栽此松人其家必与松繁茂今見數延嘉福盈家古諺信哉主人為契愛松曩時与大原少将重成朝臣以丹青作画圖需寸山前中納言光實郷以倭歌令祝録之然而其意猶未為満介余舊識偕意戒令祝千載栄且名松下亭意亦完之懇也勢不

可辞因以相生為其亭之名且祝以銘

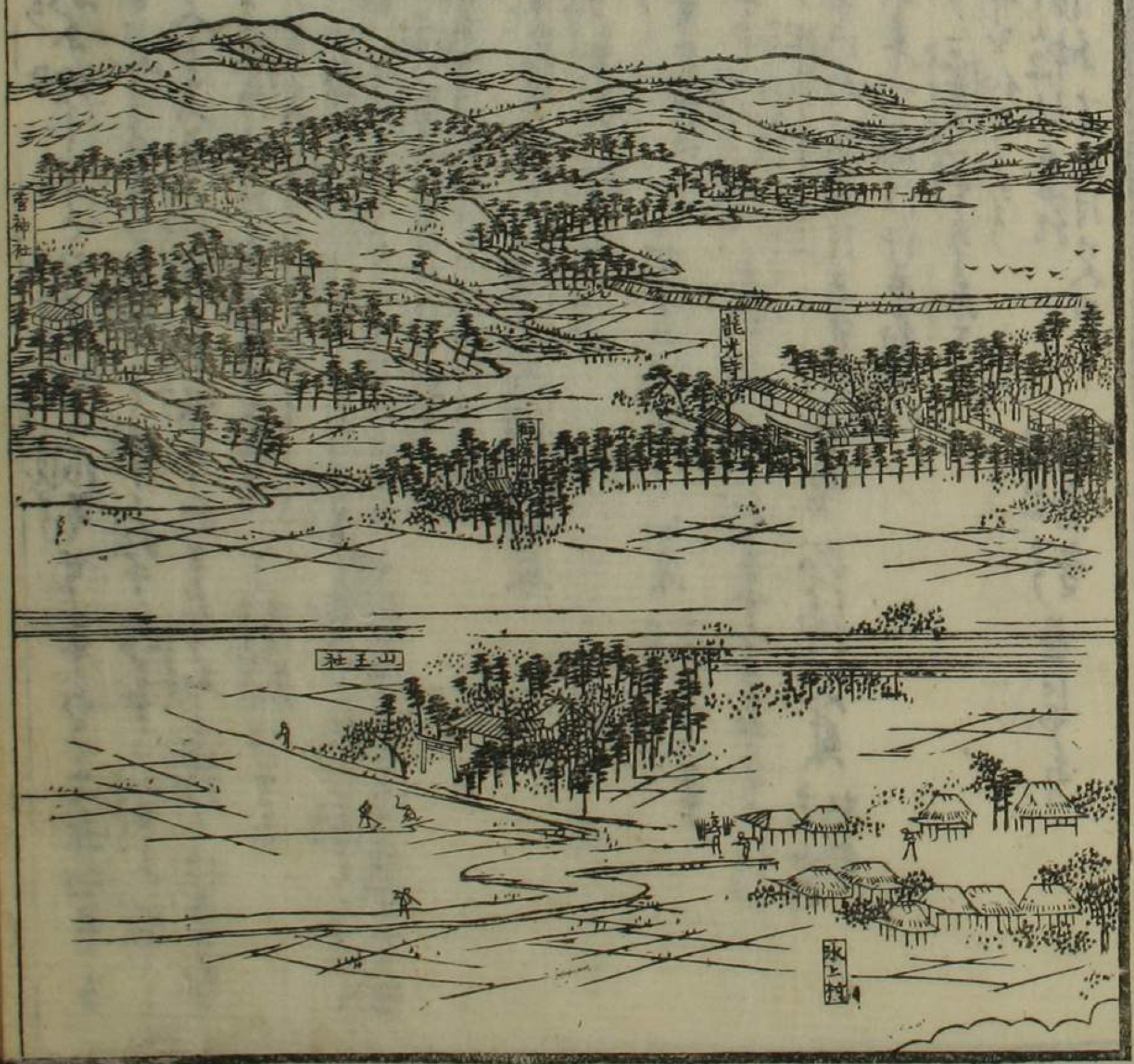
雌雄合徳　高低數栄

千載靈樹　子孫受禎

文化十二年季冬

手ふれしや　若葉小枝も　行ゆかむ　所々にちきる　千歳生乃まつ

外山殿　光實



赤面童子の形に現じまた神主出て問ければ答て我ハ赤面童子
当村に霊験あらはすといひて遥に引手神主が何にも不知
手形をとりて人々に見せる今社の辺に霊験ありて是なり当社より神楽を挙

雷塚 同所往還にあり古へ此村雷落て生の人
神楽をなしてたびたび霊気の祭一なりといへり ○牛石 同所にあり

三つ石 同所にあり古へ伝へ人魚の清光といふ者志学の禅に
香川郡に縁るもの也とぞ山田郡十河の住信光の墓跡あり

香川郡 綾松村に住ける鳥居氏なり彼所に社持院の祠を
さくらの縁で民なり彼所とくに出せり

猫 往寺 同所にあり
一向宗 常光寺末寺 本尊 阿弥陀如来

当寺ハ沙門了智草創なり

往光寺 同所にあり
一向宗 常光寺末寺 本尊 阿弥陀如来 六字名号 蓮如上人筆

当寺ハ文明年中沙門了往草創なり天和年中今の寺号に改む

龍光寺 同所にあり
真言宗 香川郡 宝蔵院末寺 本尊 阿弥陀如来 恵心僧都作
当寺ハ享保年中沙門海法印草創なり

田中妹嶽 同所にあり 三谷右衛門といふもの
或人此卵を得せしなり

山王権現 ○ 菅神社 祭礼九月廿五日 ○ 観音堂 並同所にあり

東川城跡 鮎滝村にあり 植田氏居城の跡なり

大畠岩跡 同所にあり 古谷川植田氏の居たりし

春日大明神 同所にあり 祭礼九月九日 社僧 某寺 ○ 鮎滝大明神 同所にあり

蔦坂松 当社ハ元和年中左兵衛といふ者勧請せり
池戸村にあり小松の大輔の墓なりといへり往古の世此人を志度寺へ
配流人なりしや此所まで来り九人の守宗とて廿八ヶ所なりあり延宝
四年七月七日当社の大松枝葉しげりて小松を
手折ち新樹を植けるに茂せり

一条院御宇 さきされ
今宵こそやよ思ひて小松の末の蔦坂まつきこゆるなり 西行法師

小野原 同所にあり古伝小松の大輔とかや
住居の跡とて今も土居の跡あり

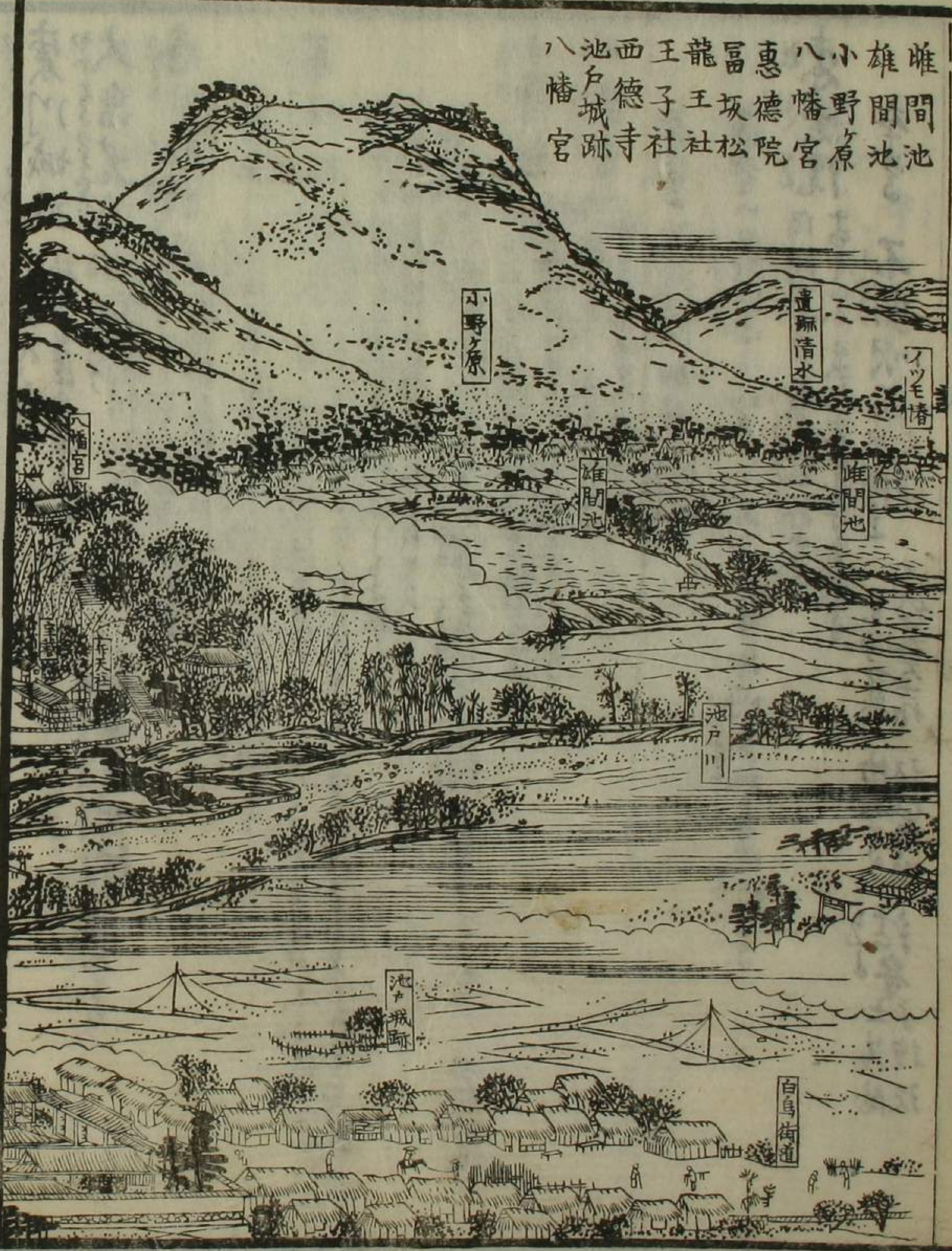
西徳寺 同所にあり 常光寺末寺
一向宗 本尊 阿弥陀如来 恵心僧都作

恵徳院 同所にあり 智光山林宮寺
当寺ハ摂津国の人にて天正年中沙門了紀の宗旨となる
真言宗 京都大覚寺末寺

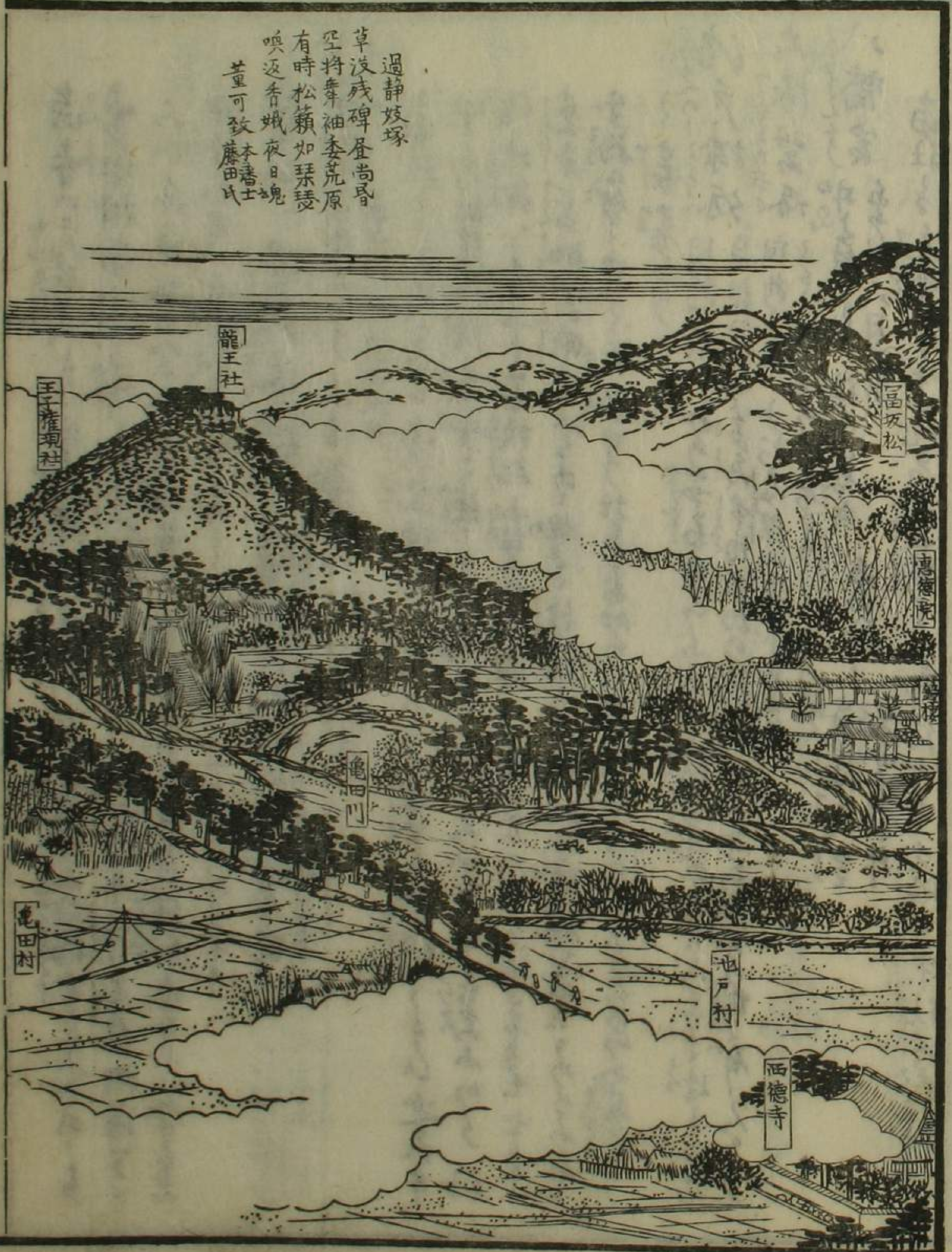
本尊 不動明王 弘法大師作 薬師如来 行基大士作 地蔵菩薩 弘法大師作

法寺 土居 権現

雌間池
雄間池
小野ヶ原
八幡宮
恵徳院
冨坂松
龍王社
王子社
西徳寺
池戸城跡
八幡宮



過靜妓塚
草沒殘碑晝尚昬
空將舞袖委荒原
有時松籟如琴鬘
喚返香娥夜日魂
董可致 本香士 藤田氏



當寺は元慶八年聖宝僧正草創なり　大神山妙福寺と号す　そのゝち
寛弘相當して兵火にかゝりて衰微あり　永正三年山城志摩再造せり
天正年中兵火にかゝりて後　通仏重甚の再興極れり　今なほ存す　寛
永十九年宮の令旨をもつて三号をあらためられしとなり

宝物　菅神像　御自筆　高野明神　弘法大師　立合御影　聖一國師筆

八幡宮　旧跡なり　社僧恵徳院　末社　王岳作
祭礼　八月十五日
當社ハ元慶六年聖宝僧正勧請なり　天満宮も御旧なりしに　延喜年
中恵法院僧正聖宝夢に感じて又御遷座を加へ　天正年中兵火にかゝり　社
僧神祇を焼ひて谷坂村小堂の古塚乃霊宝を遷し給ふ　そのゝち文禄七年
霊宝勧請義満とふ人その帰依神殿あり　神宮の廃頽をなげきつゝ再興
生駒のうちに再興せり　松原爾来河内国南丹の人々その祭礼絶ゆことなし
く豪農なり

池戸城跡　旧跡なり　此城ハ三好氏のうち…多羅尾…三好の舎弟…

大塚砦跡　旧跡なり　十河存保の舎弟…

八幡宮　井上村にあり　社人三好氏
祭礼　八月十五日　本尊　應神天皇　天照大神作
當社ハ元暦年中…より勧請なり　文政年中社司…

ハ神功皇后三韓征伐のとき三韓を追罰せらるゝ其の男　末孫…
わが僧あつく従五位下伊豆守小叙任なり

法泉寺　旧跡なり　平等山浄教院　一向宗　京都…末寺　本尊　阿弥陀如来
當寺ハ文明二年京師の何宗…草創なり

観音堂　旧跡にあり　本尊　正観音　行基大士作
當村ハ往古…大伽藍なりしが…寛文二年…

牛頭天王社　旧跡なり　社人三好氏
當社ハ長暦三年京祇園より勧請せり

康伏清水　康伏村にあり　名水なり

平木城跡　平木村にあり…

常満寺　旧跡にあり　一向宗　常光寺末寺
本尊　阿弥陀如来
當寺ハ寛正年中…西正草創なり

妙徳寺

同所にあり。妙覚山と号す。法華宗京師妙覚寺末寺。

本尊　多宝塔　上行　無辺行　浄行　安立行　鬼子母神　法守社

当寺は貞治六年卯の月[illegible]創なり

梶原平三兵衛景時墓

寺前にあり。家記に云ふ、[illegible]七年十月十七日逝す。この所に葬ると記せり。[illegible]今を去る事百年[illegible]大法水[illegible]今の地[illegible]再興せし[illegible][illegible]

[illegible]

白羽八幡宮

祭礼八月十五日。[illegible]村にあり。社僧[illegible]寺。

末社　若宮

社記曰、当社は文明年中中村[illegible]氏宗[illegible]なり。[illegible]

[illegible]一夜の夢に白羽の矢東方より飛て此地の林中に落るとみて[illegible]白羽の矢あるを[illegible]其地に社を建て白羽八幡宮と号す。[illegible]

天正十一年[illegible]明暦二年[illegible]社殿再興せり

松居天満宮

同所にあり。社僧同上。祭礼七月廿五日

当社は仁和の比、菅丞相[illegible]民の[illegible]村民その徳を慕ひて[illegible]社を建て[illegible]松居の里といへり

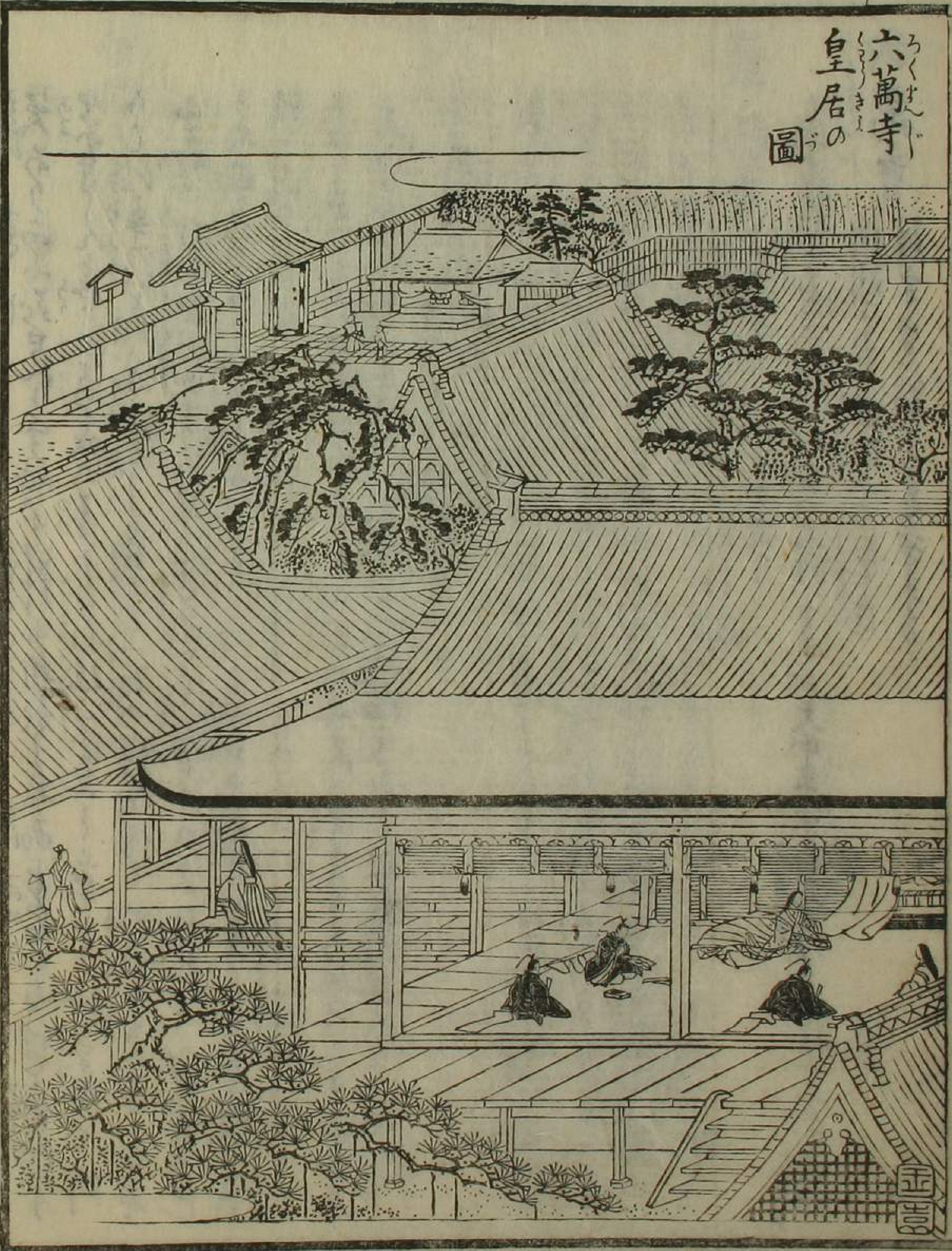
最勝寺

同所にあり。宝珠山慈雲院と号す。真言宗、八幡寺末寺。

当寺宗来[illegible]天正年中[illegible]

六萬寺

同所にあり。眉間山白毫院と号す。律宗[illegible]末寺なり



六萬寺皇居の圖

本堂 阿弥陀如来 定朝作　十一面觀音 聖徳太子作　鎮守社 愛宕 権現

寺記曰當寺は天平二一年行基菩薩詔を奉して此地に一宇を草創して國分寺と号す其後七堂伽藍備りて繁昌の綱條六方に甍をつらねて安楽寺と改む六萬寺とよぶ今も土中より此像を堀出す事あり古瓦も四十二坊ありしが今は廢して地名に其名存せり延暦年中弘法大師此寺にて千手大悲の像を造り又殿山に安置し當寺の奥乃院として千手寺寿永二年七月廿五日 安徳天皇三種の神器を擁して西海に行幸なりける九月に宰府の安を行在所として平家の公卿太宰府にありて時を待ける折に豊後の緒方三郎維義といふ者太宰府を襲ひ来る故鳳輦を遷幸して屋島に御しけるに阿波の民部大輔重能が迎の船を奉して讃岐國に行幸なり此寺を行在所と定め百官の公卿も武士の陣屋も造りわたして惣門とて洲崎北方にあり此十月水嶋合戦ありて大将義清討死して源義仲の勢ひおとろへて悪業をなす平家も勢を得て京を出立しなり此時公卿行在所に従ひ奉りしものゝ拾得子などに勤王す其年閏十月三日の事なりとぞ傳へし

嬉しくも亭山寺に身を住て後のうき世を渡りつる哉　中将重衡

いつくらか此山寺にすみ源氏の衣乃色を深くそめける哉　讃岐守某

世の中はむかしとなりぬかはらぬは御集の色にあらはし世なりけり　但馬守経政

もと銘数多ありしなるべけれども此三首のみのこりしを天正十二年長宗我部
元親当国を侵掠せしとき此寺に乱入して此鐘をうばひ取りて志度の
浦にいたる所にて其船しづみて鐘も有りとなりしかば元親も帰りきて捨けるが
久しく海中にありしを近頃年を経て太閤の御時に出現せし
後荊棘生茂りて撞木のするほどもなかりしを村人中村林英が掃除し
なりければ山林一千五百本を奉納して当寺の再興を願ひ
済々国主君源英公再興を許させ給ひ延宝六年寺号をもとし
旧のごとく成にけり
当寺の鐘は往古合戦の時に失ひて後鳴かず陣鐘となし今伊予国某の神社にあり
寛永三年の銘あり

宝物 薬師如来 鋳像長四寸貞享五年村氏当寺の本の尊を堀
江戸にて常灯明をかかげ仏光明をそへて当寺へ寄附す
又高坏一つ土肥某寄附す 高坏 右納置ところ

銘云

擅主中村加賀守氏宗室
弘治三年

高坏記
其手引をして高坏を上なる文字を見のまはりに彫付
さりて讃岐国三木郡なる六万寺に納めて合せしめその家運の信
洗水のきさ後の岸にうつまりて出ける其後氏家は中村春秋が
寺租なまらへ無く又予其を拾ひて此くとの日となりて持ちふ
篤く敬せしむ 弘治三年は氏家が栄まへし年なれば其の時
寺の宝として永くつたへたれとも

天保二年十一月

八栗寺 日和あり五剣山千手院といふ 本尊 大宮寺より来る 寺領十五石
四国八十八ヶ所の八十五番札所 是より志度寺まで一里 八栗より一里
本堂 正観音 弘法大師作 脇士 不動明王 毘沙門天 弘法大師作
聖天岩屋 歓喜天 弘法大師作 額 聖天宮三字 城氏寄附
大師堂 二天門 額 五剣山三字 大通寺南谷筆
蓮華石 寺の表にあり
聞持窟 山腰にあり
通夜所 鎮守社 蔵王権現
寺記曰当寺は宝亀二年中弘法大師当山にのぼりて三千仏十
王仏を造らしむ当山絶頂にて四方を眺望するに八ヶ国の境見えけれ
ば八国寺といふ延暦年中大師入唐のまへに来りて

本堂
聖天堂
通夜堂
二王門
人の母と
七曲

四國八十五番札所
八栗寺
八栗山頭千
仞峰峯々如
劔吾重々
青天時々雲
烟起精彩充
為五色龍
僧海量近江
八栗寺
大師堂
捫羅攀石此登臨
播海阿山天際沈
誰謂人間難可謝
蓬莱島上紫雲深
本藩儒員 山川熉

栗八粒を集して植置しが帰朝のゝち彼栗ことごとく焼栗なりしを
もつて八国寺を八栗寺と改め自他の証拠を示さんとて本坊を修
補して千手院と名付六万寺の奥院として利剱を埋め納め
一社造営して法守と号す又剱山と呼す今の蔵王権現これなり
天正年中兵火に係り文禄年中無辺上人再興す又国祖君
源英公も修補ありしより後国君源恵公の修造ありて今の如く
へりつさせ給ふ
末寺四ヶ寺并に納所坊十八ヶ寺を兼帯す

宝物 法華経塔一基 水戸黄門源光圀卿寄附 奥書に献当国延文大傳寺
外題 水戸黄門源光圀卿 享保年中寄附
蓮糸織三尊弥陀 並 源恵公の寄附 太虚空蔵 源英公寄附
地蔵尊
鵝画 後光明院宸翰 法花経 后光明皇 八宿和讃 定家卿筆 六字名号 祐天僧正筆
般若心経 弘法大師 並弘法大師筆 彫石鉢青 同作 磬 同作
阿弥陀像 弘石搭磨 秀次公寄附

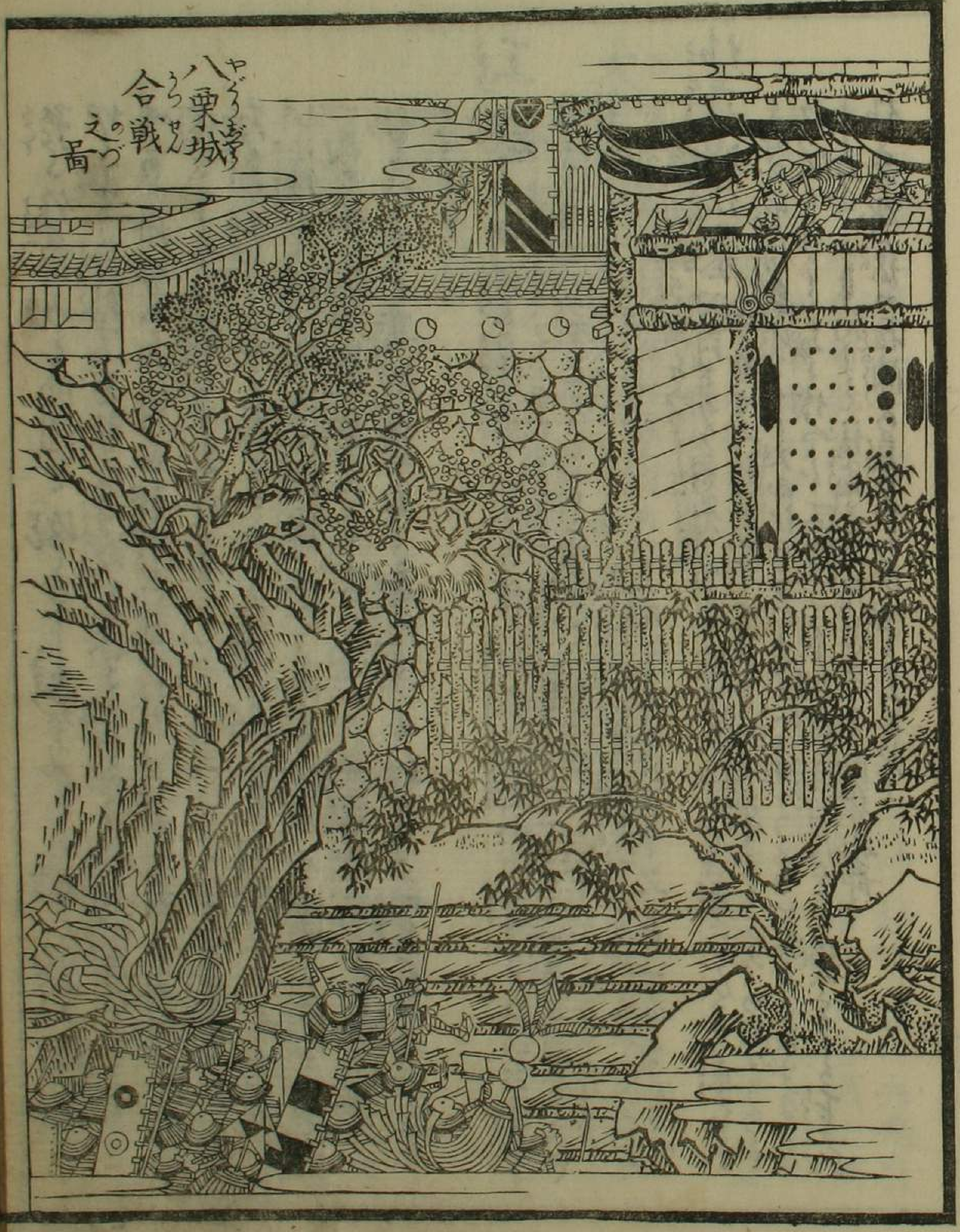
五剣山 仏法大師利剱を納めし蔵王権現社今存せり其岳の絶頂に
中峯の弥勒寺之大弘法大師秘密の釈迦の尊像を安置す ある時は大師の作なり
又月十一日より毎年同廿一日まで止宿し毎年廿日の晩ゟ文禄十一年

北嶺中にまて例のまわれ大石あり是を五十丈あり落して谷へ
埋もしさきど権現の社ある甚なりしに後寛永二年十月廿日
未の刻大なる地震して東一峰まき北へ落る大光寺の下へ落
へ崩れしとなり

五剣山
峰分五剣撫雲端　雨淬風磨影自寒
白日南溟高紫気　何人携得倚天看
尾池桀 号桐陽 丸亀人

栗化石 寛政年中ちかき頃峰の北の麓より化石多く出る其色碧
剛玉のごとし形は栗に似て研ても堅しく素雅なりとなむ 弘法大師の植し
八木の栗樹の根 と同じとなり

八栗城跡 同所にあり
中村家従同中村弥人宗卜ちかき頃迄も同所に田井掛焼之のち住居す
所々を巡りて居けるが十河存保と偉ある者家臣となり
乱入の頃中なまどぶ要害の地を構へて居城せんと将と謀りしが
すまで城の地なりしが恒れおりて後明弘の卿の後これんと謀た
馬助政武として日頃崇信する八栗の大悲が智力をいのり己も八幡
宮へ参詣しけるが武運長久を祈るさま夜の夢に及びて神慮を得て
きそ出らひ御示して返りて城を八栗山に移て剣山の法をうさべく大に務



利あらんと望むものハ大に悦び続ふ所に若ぞ承へ首政
氏ハ八栗より懸りて重宗を守らしとて かくても宗トと同じ養なり
と聞こえ件弘の擁護乃あつきを報じ先手に続く其人宗トにとらを
おこりお城を八栗に築き十一年四月廿九日に迎へしうとし手勢三百人余ハ
是がりさて長宗我部元親ハ廿年三月に南風八代八香西伊賀守
佳清の家臣人羽山行山志を兼内者として居島古戦場おすび
壇の浦といふ八栗城上の幕を見て伊那羽柴掛棟丘清久等あり
一千余人の軍勢を以て南城に向ひし久米ハ王墓に勢をつりて
南城を望み山下の長郷寺にいりしと佗陰しておく本かく馬より
下りて精々すゝみつゝ城中へ然く寂として人なき事ともあやしく
城中にかしく旗を出しつゝ忍び寄り喚て声似をしてやがて城中に逃入
りまゝに敵兵これを見て城内より勢を見て急にすゝむくう
破れとて久米長戦を挑まく城つゞきて同宗八土州長宗我部
元親の将羽柴掛棟丘清久等なり害を尽しくもろくあり
我当五千余り大小七千余戦おこる皆やぶり続くゝわ必ず御猶城
中の兵ハいまゝ子を得らぬ御心ちをさゝへ忠に勇く兼ての心
宗ト鉄砲を携て同宗ハ中村弥人宗トらの子数戦数将を
れも思ふべし寺に是と見て一散に組久米を栫中に中らく出て

勢ひ強く城門を攻る事急なりしかバ宗卜親しく
切て出て接戦す高勢の峰々谷々震動す敵兵地勢を
味方ハ地勢にくわしく上より巨石大木を落し賊々まだ逆ひ敵兵
途をうしなひ騒乱すれハ敵是を見て大ふりの大石をまろばしけれハ我
方手をまろびしごとくなれども此険を越て士卒をうしなひ
さて小城なりと攻ずとも落城せんと是より宗卜ハ居らず
一旦の術を含ミ兵ハ郎士の本営に遠く寡敵せざるを知て陣ハ
都ハいづれ甚夜城を出て唐浦より船にのり伊予国へおもむく
事のよしきこゆ

王墓

同所住吉の傍にあり 世に傳へて神櫛王の御墓といふ 山田郡と香川郡の間にて
御墓とありし所なり 此所ハ昔年記に見えたる山の神ともいふ
神櫛王ハ景行天皇の皇子 母ハ五十河媛 讃岐国造の先祖なり 神櫛王の墓といふは
此所の事なりとぞ 山田郡に神櫛王の墓二基あり

佐藤次信墓

同所下にあり 寛文二十年 国君源英公此墓をたてらる
墓のあたりに池あり 池をうめて土中より大刀を掘出し献ず
其後此所に墓をたて次信の忠義をあらはし玉ふ
志度寺にあり 源義経の文書を今に伝へて寺の宝とす
次信の碑銘ハ檀浦の墓にありとぞ

東鑑曰元暦二年二月十九日癸酉 中略 午時越中二郎兵衛尉盛継五郎兵衛尉忠光 平氏家人 等下自船而陣宮門前合戦之間廷尉家人継信被射取畢廷尉大悲歎屈一口衲衣葬千株松本以秘蔵名馬 号大夫黒元院御厩御馬也行幸供奉時自仙洞給之 毎向戦場駕之 賜件僧是撫戦士之計也莫不美歎云々

大夫黒墓

嗣信墓の傍にあり 此馬源義経の文書をもつて志度寺にあり
村極楽寺にかの馬を送り 此寺ハ志度寺の末寺なれバ
墓のおもて鞍まくらとなりたるを元禄十六年 国君源節公 儀信十六代の後裔として
て碑を建らる

碑銘曰

天下名馬莫若奥奥之良者莫若此馬藤鎮守府秀衡好騎之及源廷尉義経去奥秀衡割愛贈之初名淡墨廷尉其爵大夫因曰大夫黒渉宇治川渉一谷巉巌所謂臨陣無敵一心成功者也廷尉葬佐藤次信請僧施以此馬及太刀釜深感其忠勇也及此馬死加惟埋諸次信墓側漢明建白馬寺宋祖使賦赫白皆報其労也又詩家云千載詩人拝蹇驢杜甫所騎猶拝之況此馬与将一心成大功豈可以畜産賤之哉先君既命刊石表其墓今公又命

臣作銘可謂息及禽獸矣銘曰
纖毛猶膏　色浅驪兮　比物超光　執権奇兮
凄之乗矣　閑且馳兮　遐邇尓労　爲建碑兮
元禄十六年歳次癸未　臣十河保定謹撰　本藩儒臣　称順庵
次行の碑表及大夫黒の碑表何れも其文字国相君源英公信ん云
御輪御題として出しありしを後源部公此繇をつくらしめ刻して石に彫りて傳へ
まくらとわすくぞめ給ひける半なりや過ぎ
千歳なりし四名此文を書ける人なし

塩竈社
同所にあり

源氏峰
八栗山続きにあり元暦二年源平合戦のとき源義経ここに旗を立し峰なり
爲朝の頃ハ今の義経この旗掛石をとゞめたりあり人の知る所
縁をとゞめたり

菜切石
同所にあり武蔵坊弁慶文治年のころ長刀をもて
菜を切しといひつたふる古跡にて其地名あり

長刀泉
同所にあり弁慶長刀をもて掘しといひつたふ今に清水出る

○地蔵堂　同所にあり

継田光政墓
源平合戦のとき其ころ世の人に知られたる勇士なり
光政ハ源氏の味方にて討死の前を埋めし所なり

源平碁盤石
元暦二年二月廿日屋島合戦の節 ...

佐藤人庶六郎宗継 此所にて継田光政とともにあそびし所なり

十余人を討とる程に能登守ハ心も剛に力も強く精兵の手利なれば
源氏の兵ハやすからず思ひ真先にすゝむ者をも射おとし
矢おもてに武蔵国住人丹生三郎宗教判官の前にて射ふせらる
かゝる時に次郎兵衛尉大田次郎も射られて引退く
終に内甲を射られて引退く河村三郎
尤も退く所に判官の郎等奥州の佐藤三郎兵衛継信は黒革
おどしの鎧を着たるが首の骨を射られて馬より落
中略　忠信へ射させじと継信を前に立てかけ
てつゝ判官ちかく居よりてひとつに継信をくしく義経もなくなく
一所にて死なんと思ひしにさきだつことこそ口惜けれ
冥途の旅にも心やすく思ひ給へと仰ければ
とて判官へ具足を脱ぎて流すまじき涙を流しけり
汝なきあとにて義経いかでか判官をとる
生きながらへん事ハ本意なき事なれど
をかくて継信の遺言のごとく嗣信が勇をもて
くらしけるに自ら軍中にありて身をかへりみず
主君の命にかはりて討死をとげ
かゝる名をのこすこそ誠にめでたき者なりと嘆きて逝りし

継信討死之図

東武より仕手あまたの軍勢を討かゝり日本国を奪ひ取らんと
又おすらんと主君にも合せず先ち討すべき者なりと伝へし父母が
謀さもいとくし事かなきにしも猶き武士あまたあるも判官殿をとゞめ
とゝ流しうひたる室にも理なる義を亡さんとの年月をとふべく
ず其後吾にあるべき判官殿をも左右にたてんと思ひつゝまてありし
ともとろあひし後は又継信あれまし[illegible]や主君と共に討死のちも[illegible]
自ら後にまで無念なく主君を守る事も忠義の神と讃へらるゝ日と
世にまかりてさらに判官殿の多くの郎等の中に忠臣とて知られ
多くの勇士の中に入あり鎌田兵衛政清が子に鎌田藤次
盛政同じく光政と佐藤三郎兵衛継信佐藤四郎兵衛忠信なり兄弟
政は一谷にて討死ありけるとて又伊勢三郎は今日乃[illegible]とて
ひしく今の年も空しくなしとて継信光政が討死を惜しみ南寺武鑑に
とろふ富士山にかゝつりしけるとおもひて僧を待し落ちとつふ
金剛輪の秘密[illegible]かやうなるは仏[illegible]なるが[illegible]
郎等なとべからざりける稀なる沙汰房[illegible]
佐藤三郎兵衛継信鎌田藤次光政と廻向して後生を弔ひのへとて
今人[illegible]僧の墓室に送りまゐらせける[illegible]
まゐりて[illegible]るの[illegible]なる[illegible]乃中に

秀衡に義経なりなれば家子は継信忠信武士の鑑なれば山も
いうとも志をまもりひとへに判官殿を主となして立なるとさきくたる
ちなりし宇治川をも渡し一谷をもおとし軍けるなり又屋島の合戦
うちまさる吉例と申なりをも判官又継尉にあてけるに家ふくう
なまこは能登殿の大夫黒とも呼ばれ行きさきも身を放さじと思ひとさあひなまき
どもさりて継信忠政かれしさに中有の道も家来として引き
けり志ともあり君のために命を失ひん事惜しからずとて
勇みたれ　下略　田村まおり

中村家卜墓

中村家卜は初の名を恒頼加賀守氏家の男なり天正十八
年長宗我部元親豊臣秀吉の士卒を八栗へあつめてまもり侍る
数珠掛緑を鉄砲てるめ合戦利をとく塵浦より
待ありて封んとせしにまく風あしく下津井に着船しより
陸よりして寄せ来るとききり杜鵑
をききて歌を詠す
鳴わがまゝをききてまきとどめよ
今猶中村氏の[illegible]の後裔[illegible]林村に[illegible]宅居
まて[illegible]をとなか[illegible]なり

せしが同十四年仙石権兵衛尉秀久の招きに應じ當国に帰り同年又
東讃の備に任じ高名あり仙石家国除ありし後ハ又藤堂家に仕へ
讃州にきたりしが仙石家の役に就きさしが尾藤家改易の後生駒家に仕へ
雅樂しく高松に居住して後ち菩提を弔ひ後遂に病死せり故に
その子孫當国に多し

むかしつとてふの秋風に吹もてちらし志乃ひ草ふなく こぼれ落ち　其孫　中村春野

むかしよりとものふ同文字をわすれ来の履冠を
十念く只世臨終のこゝろを
むかし居をうけしみのゝれたらか花もその田を(?)さしもさく花の命か　本藩士　源薫世

宇龍山
同所にあり 旧生山ともいへり 源義経を討ず(?)故 術浦より屋島の西方(?)に 山をこえて来りし所なりと云 梵(?)大將にまかせて打(?)かゝりしとも云

田井城跡
同所にあり 中村加賀守氏家(?)およびその子肥前守(?)居りし所 氏家ハ 香西(?)公の一人なり(?)けるか 天正八年 十河(?)存保と不和にあり

仲(?)くらひ(?)の跡なりし所(?)に天正十一年正月廿二日 氏家討死 又十河存保と不和あり
しかれ八栗ニ新城を築き十一年秋の比ニ移りけり

開法寺
同所にあり 對(?)御山遍照院
真言宗 八栗寺末なり

本尊　大日如来　　鎮守社　稲荷大明神
同所

牟礼城跡
當寺宗堂未詳 天正年中 兵火にかゝり 寛永九年再興せり

同所にあり 牟礼孫三郎源(?)某の居城(?)にて 寛永(?)の頃 高松藩(?)の郷士なりて 其子孫は 生駒家に仕へしく 後

七百石をたまひ大坂籠城の役 本村(?)右門守(?)主(?)の子(?)に属す元和元年
又月七日右門守(?)と共に出陣のとき先陣をあらそひ討死す 男
兵庫(?)某是およびその孫共にこの所に居るのち 岡(?)本源(?)郎左へ仕へまつしく 孫
とも子孫ありて太郎村にあり

惣門跡
同所 田の中にあり 元暦二年平家ハ一の谷をのがれて西海の波に漂ひ 讃岐を
たよひ後當国に(?)わたり 六萬寺を行在所として 総門をかまへて屋嶋を
守らしめけるに 源義経の兵船(?)乃(?)衛(?)家(?)をかまへけれハ 惣門かくれしが 源
氏の兵共(?)入乱り 家の門(?)を(?)衛(?)しける所(?) 兵(?)ことこと源氏の惣門をうちやふり
義経を(?)終(?)く討取なくうちそんせしを 残(?)君 源(?)英(?)公(?)乃(?)入部のゝち 御門を
建させられし御(?)門なり 其(?)跡 なせり

惣門ハさらなる 二在(?)久しき御(?)代の志るしくあり

数珠掛松　佐藤兵衛尉継信墓
同所にあり 佐藤継信ハ義経の身代りとなりて討死す
のちに其墓あり 其(?)処(?)の地に祭(?)りしく
中村某(?)ハ 正(?)の主(?)非(?)の木を今をさかりて 葬(?)せし

経人(?)にて 八栗城(?)攻の時

射落畠
同所にあり 佐藤継信能登守教経の
よつて平家の矢(?)を射(?)れしを 射落しところあり

祈石
同所にあり 海中にあり 源平合戦の那須与一 扇を
射るとき此石に祈念せしところなり

駒立石
同所にあり 那須与市宗高 駒を立し所 源平の磯にあり このところをいふ

源平盛衰記云 元暦二年二月廿日の事なりしに 源平又戦んとするに

沖より荘りたる船一艘渚に向て漕よす柳の五衣に紅の袴着たる女房あり又紅の扇に日出したるを挟て船の舳へ立て是を射よと源氏の方をぞ招ける此女房ハ建礼門院の后立の内にて千人の中より撰出せる雑司小玉虫前とも又舞の名人にて今歳十九才なるが二重の紅衣の裏の眉なる顔色香の薫(かほり)繕て出るも筆にも及ばし折ら夕日に輝てなど丁寧揃てを送る連も西国までを百日もそゝりくるを出たりけれバ扇を立たりけるハさとら是放高倉院厳島へ御幸ありし時紅に日出したる扇くし乃とき三十本切立て明神に進奉ありし時平家都を落しゃうしき厳島へ参社ありけるに佐伯景廣此扇をとり出して是ハ平人の此扇ハ明神の御秘蔵なり故院の御情帝業の御守りなるべしとて是を上たりける扇を持せらるハ敵の矢も遠く平家におかれりけるべしと祝言しけるとぞ其時を見て源氏射落しなるハ当家軍に勝つて射負せられ源氏が利をうるなるべしとて平家の占うべきをそてられたり○角しく女房ハ見えり源氏は遠てを見をとくる南庭の京家のありあり目を驚かし心を迷さす者もあり此扇諍り射まじと評判鈴を作りかき鐘を鳴る者もあり判官畠山を召て重忠ハ本蘭

地の直垂に萌黄縅の鎧着て大中黒の矢負ひ滋籐の弓の真中とり黒の馬の太く逞しきに金覆輪の鞍置て判官の前にすゝみ出て畏て候へバ義経ハ与一が着なる角揖さらバ宗てと無念き射よと若き射手とこそ聞けれ射当なんやと畠山長く者の作家の面目と存ずるに承りて乃ず辞退申さんとすしき怯なりとて鬼神とても恐るまじ地背の者なるよしけるにふけず候そと見えらるとし候もおろかなれどもちつる射そんじては弓の恥辱なるべく源氏一族の御恥辱と存じを他人に仰付られ候へと辞退しけれど判官大に怒り畠山重忠が申す旨の理なる悪く仕るべしと源く助宗が子に十郎与一宗高とて弓の上手あり人々も見たしけるに今ハ辞すべき様なし畏て与一ハ十郎とて是の射る目の奥こゝろ二十四さしたる白羽の矢に名残の心を治めて行く渚をあふきしろがねの判官あの扇を射させよとて出るのもて一合の弓を落せしとき弓弱くしてよき馬に乗り弓を持つてよく小振しく宗の弓手の臂を掛につかせて

山本
規方
玉蘭源成和

義経弓流図
横瀬
貞臣

矢仕りしも有らず。爰に与市冠者は小兵にて候へども無双の的
なれども、つゞがなく彼が宅の矢仕りのべしとて、すなはち御下さるべしと貢。紫糸は紺村濃
に織くへりさしかば、与一騎とぞめゆくりける。白日の
の重籐に飛風の鷹羽、角及甲居頸になし、二十四指したる中黒の
矢を負ひ、滋籐の弓に赤地の錦、直垂に萌黄の鎧着て、歩みをおび、岩にむかひて
洲崎に立ち、馬の足なる目赤鹿毛に乗りて、駒に白き鞍おいて乗り出で、判官の前
に到り事して、畏まりあの扇、仕らん情の不測がたきに、その手に
与一弊を蒙りて御申さんとて、伊勢三郎義盛、後藤兵衛実基を先
として判官の前に参り、面々の所望に因ては遥々に参るなんと、手
兄の十郎、指申すなれ、子細や候べき、疾く参りて、浪上くらくて
ながらも中々さき内方の遥半なりけるに、とうへ立ちて一矢にて射通し
とぞめきまし、其方の舟、操島帽の引く、荷の組毎の所ぞあしらはせ給
揺僚扇の方へと打むかひ、与市生年十七歳、紺糸威く小鬢生ひて
のおやさる乃東狼優なる姿にぞ見えける。既に矢を放ちまぜて
弓手の沖を見わたせば、主上を初めまつり国母建礼門院小宰相のつ
女房たち、船を数へ並べて、屋形くの御簾の内、御座を見物さへ
ゆるさず待ち居る。その先までも物々しとかくるまよりも塩風に
吹かれて、そぞろに扇は東乃沖に舞うとぞ見えつつ、妻手の沖を見わたせば、平家の

軍船屋島大臣を初め奉りて甲冑を帯して数百艘の兵船をならべ
て立たりしとて、蒙る浪の陸を驚かさず。源氏の大将軍大夫判官をはじめ
大勢轡を並べて見る定の御宿所、とにかく源氏の主君
目に汗を握りけるさま、沖を満ちて推寄へ、陣所も嘆息す。
互ひにしもき浅なる程に波の漫る迄、ひた入れてしも
沛然の暮なまし、海の中まで入りて、緑を見ずして行かば急ぎ結び
とど息つき、泳ぐが如くにて、鞍を以て足をぞ遠く打ち、扇の方をにらまへ
日ざし指出、西風吹く、船の縁を打ちて扇も竿に定まらず、揺られけり。
くる々と廻りて、扇の面を射つべしとも覚えず、一筆の無事と思ひつつ、
眼を塞ぎ、心を鎮めて南無八幡大菩薩、日本国中大小
の神祇、別しては下野国日光宇都宮、那須の湯泉大明神、弓矢乃
冥加あらば、この扇を真中射させて給はらせ給へ。源氏の運もきはまりて、
家の弓矢も是を限りと思へば、此矢を放たずして、かくは海中に沈みて、弓折
目を閉ぢて見るに、扇も是を射ずして、身を射る事もなく、あらばまた
此度此の縁の本を射よ、遠くて見ゆるほどに、目の外に数とて、射すくめて
矢筈を放つて、弓手の小指につがひ、引きしばりて、ひやうど放つ。
さて、十二束三伏の鏑矢を抜き出して、弦につがひ、強く引き絞りて、鏑を
ひやうふつと射切て、扇の源氏の方より見ても、ひやうど響きて入るなり

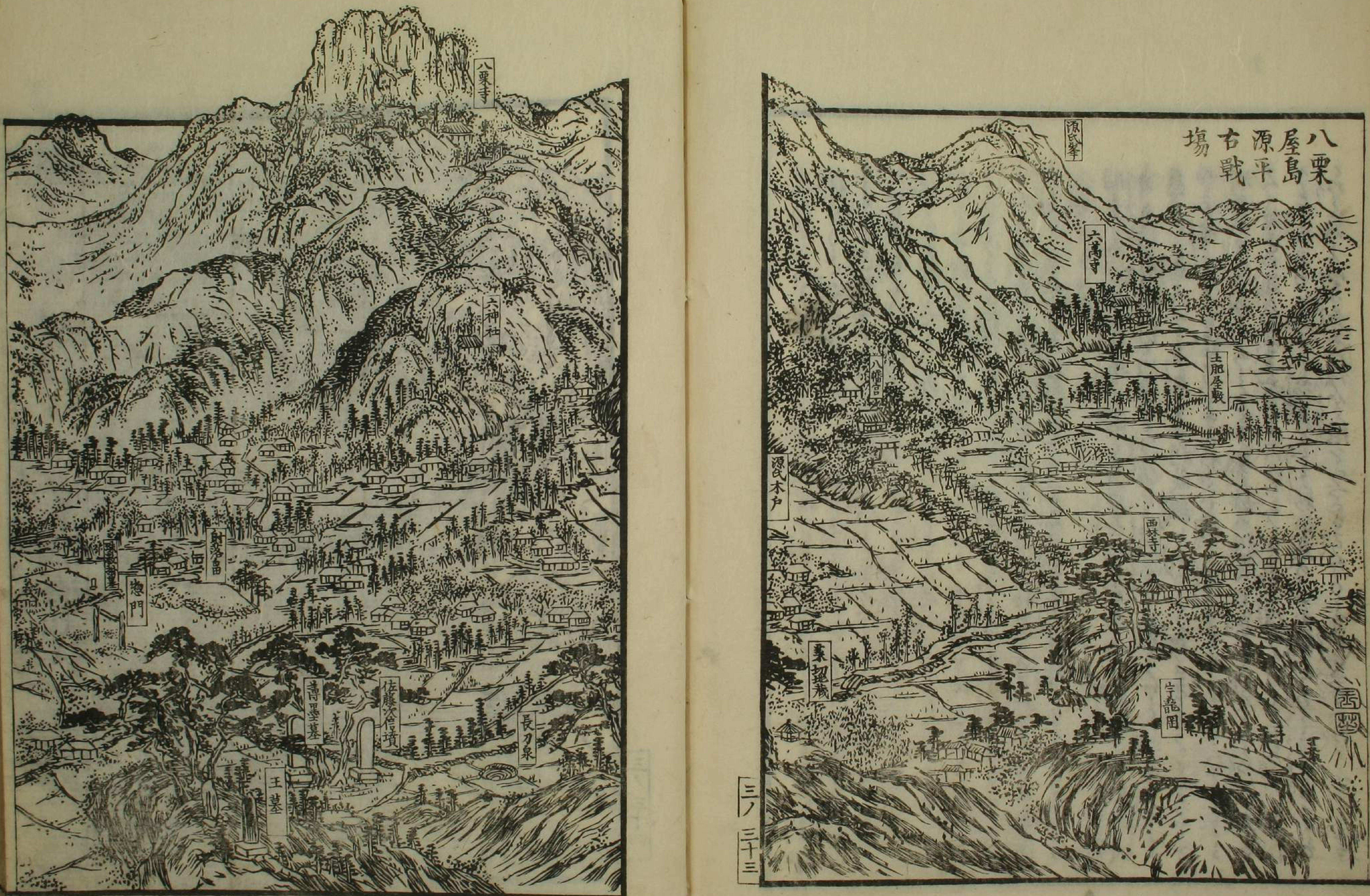
うち入のころふ七段ばかりを狙ひ扇の紙ふ日を出したるを要ぎはあり
半月のかどと志して弦を放つ浦響くまで鳴わたり半月より手
前ぞふつと射切ければ半月は船ふおちて扇は空ふひらめく
さながら中ふひらめき流れて海へ颯とぞ入ける折から夕日かゞやき扇は
波ふ漂ひ浮ぬ沈ぬ龍田山の秋の暮ふ似て誠の紅葉は流るゝ嵐のすゑなれや
て御覧あり源平の両軍も是を見て平家は船ばたを叩て感じ女房も感
盾もあらぬ斗り賞じける源氏は弦の箙を叩きしく射たる
射たりと感じあへば辛苦とも思ひみて扇の下ふ立たる紅の扇ふ
白きに玉虫

時なるや我やまちをとらへ与一は即ち相従の者のこと
平家の侍伊勢三郎義盛が下ふ十郎兵衛射家員とらへ着
あまりのおもしろさや感に堪ずして黒革縅の鎧ふ甲は着ず
引立烏帽子ふ長刀を持て扇の立たる所ふて舞ておる一時
舞てぞ立たりける源氏是を見て強くの郎党ありしが是も射べし
きゝて射まじきかと射よといふ人もあり又どうと着もあり是射べき
感ずる者もあれば情なく射べき事かはといふ人もあり扇
拍く人をも射ずとも思ひしかば是ぞなりといふ人も多し扇
をば射れども武者をば射ずといはゞ抓矢をあまりつくも

是ふおいては只射よといふ者も多し思ひのほかなればわらくふとまどひけるを
情は一旦の事ぞかし人も欺を知らむは大切なりとて終ふ射ければ
さぶめかるちとは扇射ぬきて名を高くしてかゝるあれば
又与一は源氏の大將へしく海へさしたれば征矢を抜出し九段ばかりを覘って
引きかくして放つ十二束三伏頸の骨をつらぬきて海中へ
ぞ入ける船の中ふは音もせず射よといひたる者ふはあ射たりとひふいそ
とひける人は情なしといひけれども一時が内ふ二家の名誉を得しいう
なれども判官大ふ感じて白き葦毛の馬ふ黒鞍おかせて給ふ
乃ち与一ふ此功の面目を施し屋嶋の浦にて稲なせたまふ世の人
扇をば海のこととなすほどのこれを誉ぬはなし
日出たし平家方よりもやらひけん楯つきて一人
長刀持て武者三人渚より源氏方をさして招きけり
判官安からずや思ひけん若武者ども馳出せと宣へば
武蔵国住人美尾屋十郎同四郎同藤七上野国住人丹生四郎信濃
国住人木曽中次以上五騎馬に鞭打てかゝるまづ楯の陰より黒羽
の大きなる矢を持て真先ふ進みたる美尾屋十郎が馬の胸板を
射たる箭を馬は屏風を返すやうに倒るれど
やがて弓手の足をこえて太刀をぞ抜きける

まこと楯の陰より大長刀うち振てかゝりたまへば琴の屋権十郎が小太刀太
刀うけとめやゝしばし目ばかりかへりみず久しく戦ひけるが太刀
にて薙んずるかと見る所を左へ飛びのき太刀をもつて兜の錣をかいつかみ
引よせて手をさし延て琴の屋権十郎が兜の錣を掴む つかまれじと延る二の太刀
組逆さまに鍔の座を膝にふまへ引ずり首を掴しが俄に脇差の柄より
ふつと切付て逆さまにおさへつけ首をかゝんとする所を押のけ
権十郎がそこの屋権十郎は脇差の鞘払ひ信が逆に倒れたる所をおさへつけ
敵は起んとするをおさへて兜の錣を左手のもと先へおしよせて首を掻落す
立とゞまらん若者あるもあり逃る者をば目にもかけず中へ見えて京の家の郎党
なり悪七兵衛景清より多勢に手を負て中の楯の陰へ立よりて逃る者の首
をとりつくすはいかにも悪七兵衛景清が若党八人の者も景清が鎧や
とて外百余人溺れぬよう楯を離れずしてつきなげて源氏もほどなく起るやとて
そ控へたる
寺は地を大なる石を積みし所あり毎年五月五日の祭礼毎に角力をなす其の由縁も
同書云 伊賀と摂津の境ちかき大和の小坂と申す所に五月五日のならひとて
諸国の者集りて富士川よりおこりし京の小侍の上手にて
小坐りに十日も一日も溜りつきりけるこの毎に集りてうちまじる軍をせ
ずして寄せんとする大勢の中へ入てあやうきと危く

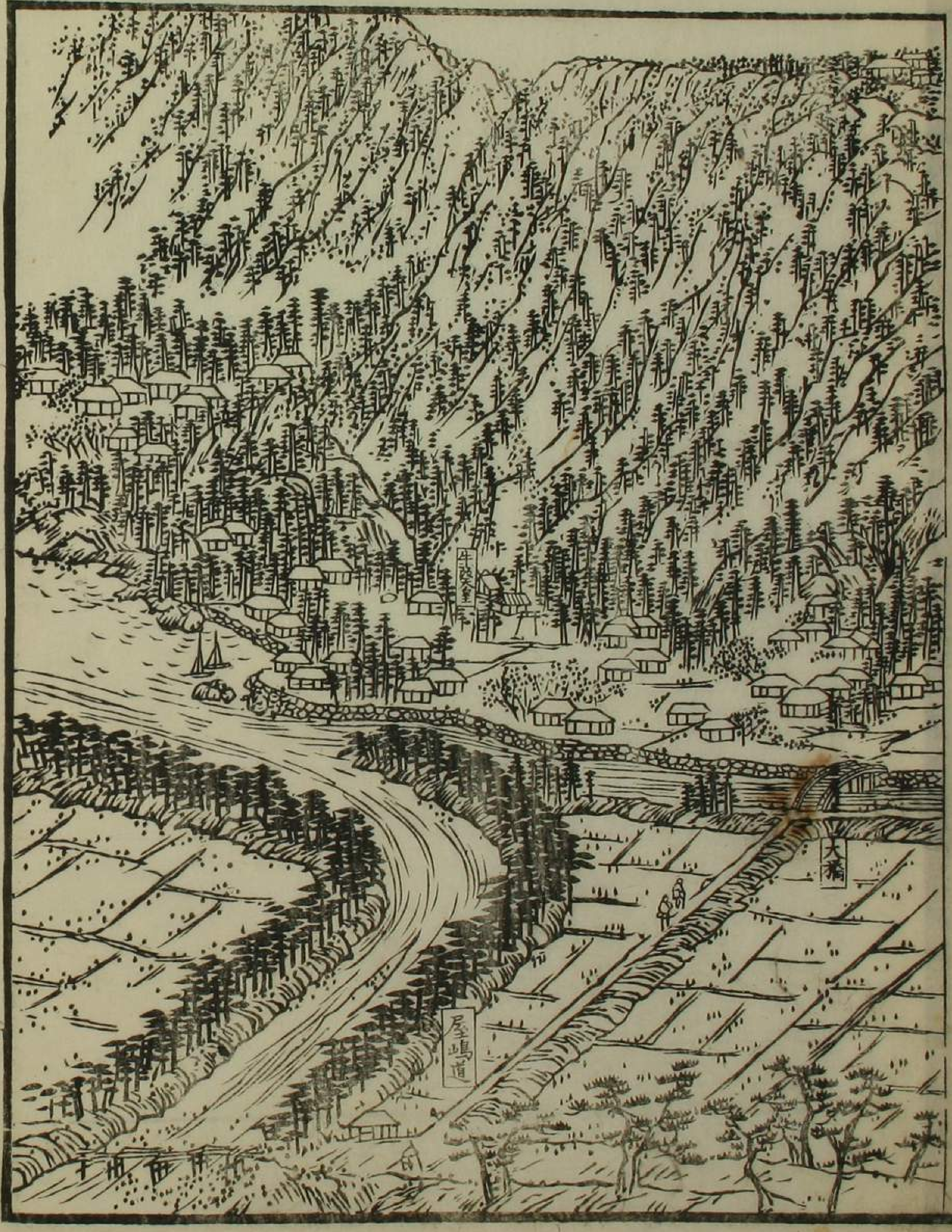
見えしくへうちを志てせず焼切狸の藥地乃陰より裸になりて猿鼻
褌をうちて刀二本もちて海へ入る敵も味方も見てこれぞ稀なる六郎が見しは
ことに己が家も甘ずる人の紋をお知らして軍に加はりて千代に角立てすれば
ひとかたならず水につき深く沈みて宝寿を出して海へさらりと引くなり
陸にて甚だ六十人の力をもつて人をひしぐもの人々は深くぞ覚えて
ゆゑに六郎が首をとりて聟と呼ぶとぞ水の底を抜くて源氏の手柄なり
うちよりて判官見てうち笑み手に入れて上件の子細を申す下知
なれども思ひしよりも鶯造の太刀と称する宝物そのゝち兵衛
佐殿も武蔵の国の住人千余人の勧賞ありて伴ひ甲し与へける
西国なり下略
同書云 上 判官猶も寄せくる敵の古狸まで打入て蹴ひろげ越中次
郎兵衛盛嗣をはじめ、ひしと大勢の兵の国をうけて熊手をもつて
熊手を懸んとうち寄せる判官の冑を狙ひて悪しくも熊手をもつて太刀を
抜きて熊手をうち払ひけれども判官を狙うて打ち落す所あれど
判官は弓をとらんと手を差しのべ判官を熊手にかけて引きよせんとすれども危く
見えしかばここに源氏の兵共おしかけつゝ掛け寄りて推しとめて
熊手を太刀にて打払ひ馬の手を取り軽く後ろへ取りて捨てて
あはれ義経が一身の危きをのがれたるや、かほどまで拾ひ給ふべき


八栗屋島源平古戰場
八栗寺
惣門
王墓
長刀泉
源氏峯
六萬寺
八幡宮
土肥屋敷
源氏木戸
西林寺

屋嶋寺
不食梨
加持水
鞍掛松

庵治村
内裡跡
菊王墓
黄牛崎
駒立石
洲崎寺
相引橋
弓流

悪猿くも帝を悩まし判官ハ軍将の身をもてこれ程の弓を人張かへ面目を
失ふまじと平家に奪はれまじと弓をかきよせんとし給ひけるを
能登守教経ハ判官を射おとさんとて只一人汀ちかく
小舟にて進ミ出けるを佐藤三郎兵衛継信判官の矢面に立ふさがり
教経の矢にあたりて馬より落ける菊王丸ハ継信の首をとらんと
走りよるを四郎兵衛忠信是を見て菊王丸を射とめけれバ教経
小船より飛おりて菊王丸をひつさげて舟へ投入けれども
ついに死しけり判官ハ継信を陣の後へかき入させ
手をとりて其いまはの際を見とゞけ給ひけるハ
生死を共にせし家の子郎等の情いとあはれなり
ひさしく名を残し豪勇の士の頸を取て源平の
勝負ハ此一戦に有と両陣の兵ども目を澄し敵も味方も
互に感じける其後源平の戦ひ終りて判官
ハ御勘気を蒙り給ひ兄頼朝の怒にふれ
ても猶武勇の名を残されしハ源氏の誉なり



あかぬまでも銀にて飾とみに此保に三つ左右にひとつづゝある事なり八挺
を名付られ保元の軍に鎮西八郎為朝の着られる重代の鎧なり
されども命にかへられぬとの志を感じ強力の軍勢朝敵なりとてさらに蒙めを
くまへ宗行家門の西國と定めくうちまへそごろよろ下略
平家物語に一日戦ひくろし彼ハ入る事ハ平家の兵ハ陣を捨び源氏へ降り
うちよりく難き松の中なる松山に陣どもせられる源氏の兵をもいての
三日が月ハ藤が谷の一所日播磨中に備前を出るて大風大波を
御まて目勝まず明日に阿波国播磨へ着く軍し終夜中山越えてもりて又
一日戦ひしうちまだハ人々も多くを討捕りて或ハ甲を括つし或ハ鐙の
紺を綴などを挟として前後も不知ず落ちるされども平氏の判官と伊勢
三郎とハ楯ぐりの判官ハ多く兵を与へ勢く敵やまりてますんしまゝ伊勢
三郎ハ陸き討ぬ陣ひて敵をうち其ちの者移討んとて付るゝ平家の
方よりは能登殿を大将軍として夜夜討りせんとうち寄りてまて居たりしも
越中次郎兵衛と海老名次郎が先陣をあらそひ終を夜も空しく明けり
よくもせば源氏なりがハ安く落べき多勢ぞかゝるあたら甘もての定れ極めなれ

図 国風純友合戦の話

前右平兌云上暮天慶三年藤伊予掾純友の討手として山陽西海道を

左衛門佐藤原倫実ハ二千余騎を引率して二月十三日都を立て
二百余艘の兵船を浮べて同月十九日屋形の沖にて純友が一党を推寄せ中略
合戦ありし戦利なくして卿の海の沖まで追ひて備後の国へ引しりぞき
又も大軍を引き上げて倫実が勢を集め純友つらく逆浪を振ひ
四国中にて大宰府の城に有るなりて其中にも阿波の国風を立る大軍
に属し新しなの住人藤原倫実てありて近日攻来るべきよし聞く
さまへいまき推よせて退治すべしとて其勢三千余騎にて押出し讃岐
国の松山に陣してすぐにまた同月十四日伊予掾純友が
百余艘の兵船を招へ阿波国へ向ひしが讃岐の松山に敵ありとききて
郎等を率て潜かに敵の陣をこえて其勢に向ひ合戦して三ケ所
より火をかけ思ひもよらぬ小勢なりとて後に門前へ寄てから時の声を作り
まかりこそかかりける大軍ハ忽ちに討破られて支ふべくもさらず左右
なく切て出んとせず然るに河に十方より囲みて射けるが寄手数て
こさでも引まず搦手より攻掛りかかりける程に倫実へ先陣の勢を
率して其勢八百余騎討ちその雲霞の如き陣の兵をすぐに引く出
大勢が中へ切ての入多く乗て突の西へ馳めぐり七八度が程
国とも討死する程にさしも大軍みろ起に揉立て流もさしも
引くる敵も倫実もおもひて引て四国の兵の息を継ぐ事まつる

急に手とへ交々く離兵きうふ拉んとす團風の操本櫻間に及び切て亘
七百余騎にて交合せて見らせぐ島にまくて若千らくまでて引退く
權亮純素くまとくつんて二心のきさんでるもの余の作法をぞうけなしさんす
石しとて伊賀大寺只升燒山をさとをうとめとしくて退去系石余騎なる
の自畏をなし弾とろうへ進立て鎮ひろうを勢を程しくて愛くを而と
向くさやうもなうりつ出家でまするを悪くてらをに中山をさして引退く也
数さままで討まとる者へなうりのきを摘手負ひる者多くのうちを尽くて
逃てくて去ろう帰りへ出家をる人を縛にて討へずうりのしを御神の雑穢にやより
之今へ行所での変ゐ有ぐさき枝て淡く日まうう行所明日を出て又之ろ魂ふて
塚を然と行くてぐうふ討をそ梯てさうくうし様て国風も行方なく此彼にて
淡波の境なう中山の面乃山を中に散じく中にしろうを不審に乃行人枝尾
右馬允源大家一族従来相具しく未労に余家続ぞて十四日の勝を家く
後紀にて出風の傳に訖加ふ下畧

洲崎寺

同所にあり 眺海山泰通院 真言宗 八栗寺末寺

本尊 聖観音 弘法大師作 鎮守社 地神 恵比寿大明神

寺記曰元曆の頃大合戦なりしが源平余戦のとき言夫の為に集まりて
ぬ死のとくえども本尊乃悪縁にふせぎにまぬかれまてうゝ夜て宮殿焼失ぞ

平家蟹全圖

平家將士此ニ頽領紫蟹空傳フ
亀面名晩汐早潮雖解甲ヲ二
鼇八跪自存兵居迴洲渚成
愁壘身任風波是恨城宿世
劫因猶未盡海龍王處也横
行ス

朝川鼎 号善庵 東都人

いつの世しま 致へ
うかれて手に寄りて
暮ぬるてしぬせとしこ

藤乃屋浪好

潮引て
りん浦月も暑し
平家蟹

栢亭

源家凱歌を奏する日五郎義俊を今寺の銭として多くの在家ち係を
焼亡せし事を悲しみ伝ふ乃ち寺を伝を造ると書ひ給ひ伝坊を建立あ
りしと天正年中土佐兵乱入の時も悉くかくりえ保十二年再興とす

寶物 水月観世音 源義経公の守本尊として伝へる所なり

当寺をとよげうへ利益を行をあるべき伝を交えて伝へ
らんとあらうど寛平中投撫の息を伝ふ伝くく
院とも全く絵が当寺の住僧ふ命して焼失の
伝に散とう乃ちくき年れる本堂の本尊ふ移し
さつくしうろふくくの観音ふ当寺にて拾ひ伝
ちくまうく絵像を伝ふる涅槃会の節に掛く

西林寺 日本にあり真言宗 八栗寺末寺 摩尼山光厳院

本尊 薬師如来 弘法大師作 鎮守社 三社

当寺は古え北山に天正年中兵火にかかり元禄十二年今の地に
再興せり当村八幡社の別当なり境内に弘法大師作の石仏あり

土肥屋敷 同所にあり 源平合戦のとき土肥次郎実平
陣屋とせし所なりとぞ文治年中右衛門尉と云ふ
出せしと文書にありてたしかなり
ここにて今も字を土肥と云ふ

武の蔵鏡寺の大臣道真公の御印章なりといふ
寛永年中御預ケ回八幡宮へ遷し
土佐次郎実平なり日本にて一文書あり紙のうらの継目に印
ありし文字ありて当寺の宝物なり

当村ふ中村の外に古き淋しき者あり地を堀り
篠なる仏像を得し生駒屋へ捧げ是を目利す
我元年にて回く将軍家へ献上す
台命ありて仏具ふ金五十両を給ひて賜り

八幡宮 桑村にあり 社僧 本地堂 弥陀

愛染寺 日本にあり 八月十五日 祭礼

本尊 愛染明王

土佐兵衛墓 大洲村にあり 天正十二年四月長宗我部元親南国を侵略し
土佐氏をとりて皇国の守護とし一郡を与へり
しかも大洲に於て家臣と共に自害せり
その後大洲の地に墓を建て
家臣の墓をも築きて
墓の跡今にあり

本を害て利ある事を好みて悪欲を信し退衍しくこそ進まう
徳とすそれ故に鬼の子は變とかくる形を變く人の事を離る所と是て之を
明月に形の八宮の内理より内脳を送りて年えて細にそ隷やし
肉搨なりとも今もいかなどとも魚ありひは海土なるをもつく製あるは是を製なり

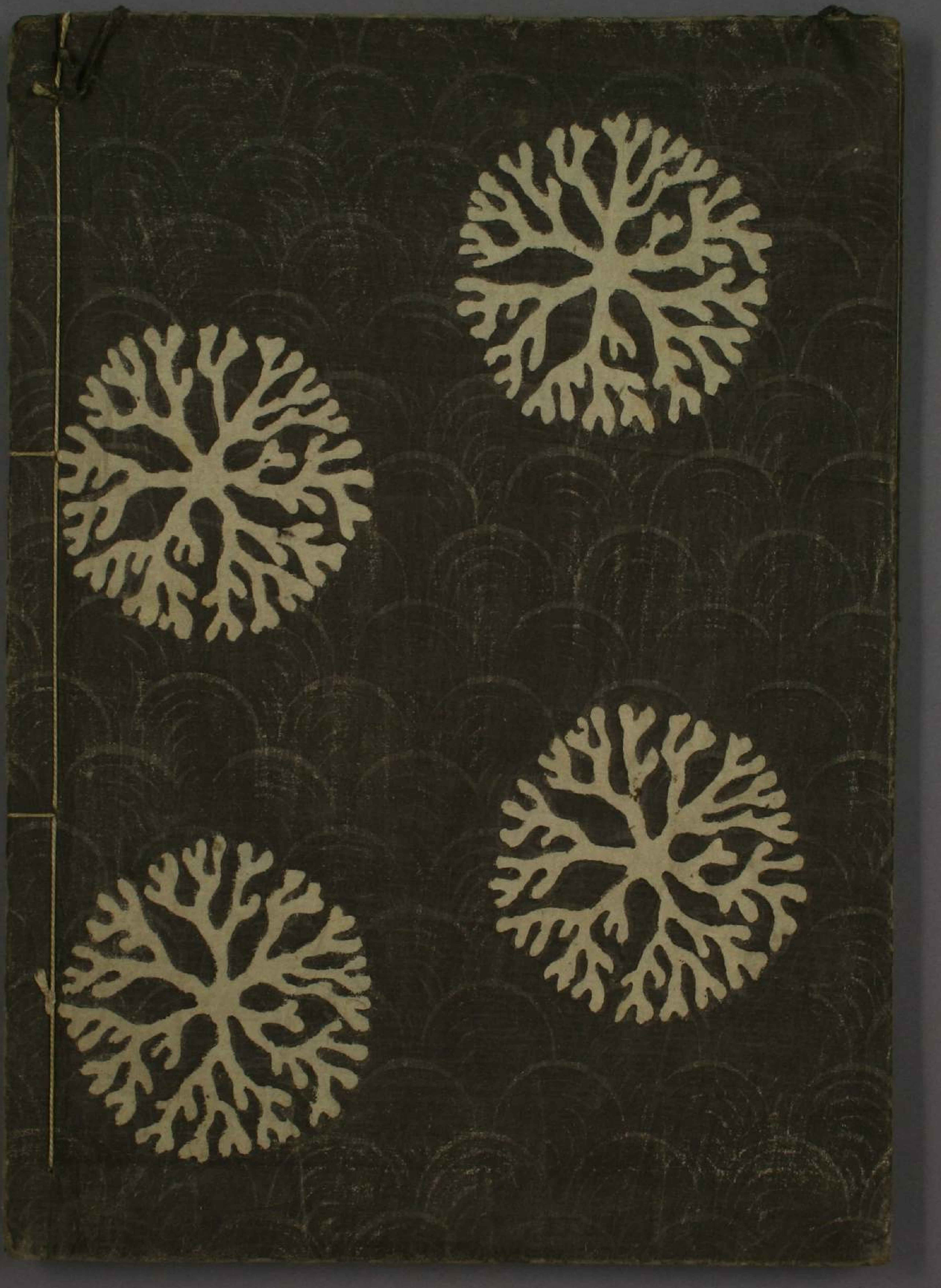
小屋縣主宮手が妻の話

日本国現報善悪霊異記曰讃岐国美貴郡の大領外従六位上小
屋縣主宮手が妻は田中真人廣虫女なり八人の子あり富貴宝多
にして田畠銭穀お多しまたその主が妻不仁にして慳貪なり酒
と沽く厚利を貪し又人に稲を貸すに小斗を以て大斗にて
出して大斗にて納む是によりて債者その惨酷に堪ずして家を捨て他国に
走る人多し又その人まちを殺む年一寝臥のごとくなりし宝亀七年六月
朔日より病床に臥し七月廿日夫及び八人の子をまねきて語て曰
我夢に閻魔王の廳に召されて王の曰汝大罪三ツありてここに召す汝多く
三宝の物を用ひて報ぜず汝が罪一なり酒に水を加へて厚利をとりて汝が
罪二ツなり斤量二種を用ひて汝が罪三ツなり是をもつて汝を召す
所なりとてかの罪を示せりと語りて後その日死せり家族集りて
猶七日目の夕べに及びて蘇生してその棺の蓋おのづからひらけたり
かくて見れば腰より上は牛に化し頭に角を生じ手は牛の蹄
となり牛の足にてつかへ歩み物をくらひ糞土に臥す

今までの遠近の人是をきゝて驚き異しみ大領及び妻子なども慚愧して
罪を懺悔して悪業を造りし事を悔ひて三木寺へ雑物を寄附し
東大寺へ牛七十頭馬三十疋治田廿町稲四千束を寄附し又他人
に貸す所の物の負債をみなゆるしたりさて其のちも
なほ国司より官に達してんとなせしかども又五日を経て死せり国司郡司見る人
人々悪業の現報なる悪報なると諫懼せざる者なかりしと

櫻井田部連貞相同貞世

三代實録曰貞観十五年十二月癸巳讃岐国三木郡人従五
位下守大判事兼行明法博士丹波權掾櫻井田部連貞相明
法得業生大初位下櫻井田部連貞世並改本居貫右京六條
一坊

讃岐國名勝圖會巻之三終

无礙菴